

百三、内魔驅り盡して始めて安心

清潔法は何の爲にするか、悪疫流行の時代の内に微菌が有ると感染し易いから、其感染を禦ぐ爲ではないか。乃ち室内が清潔で、微菌が少しも無ければ、我門前に黒死病や虎列刺が何程行列しても心配がない。今も夫れと一般で、外に何程外魔が跋扈しても、是を吸引する内魔の弱點さへ無ければ大丈夫ぢや。

處で我道場は、此内魔を降伏する場所ぢや。坐禪は内心の微菌を驅除する活法ぢや。心頭一塵を止めず、日に日に新に又た日に新にして、磨いて磨いて磨き上げるが目的ぢや。壁の破れは塞いで置け、心の穴は繕うて置け、風は壁隙より入り、魔は心隙より生ずるではないか。祇園が魔窟で有うが、宮川が姪窟で有うが、内魔姪魔の無い奴に、如何して取付く事が出来るものか。

阿漕の平治ぢや無いけれども、破家なれども己が城廓、建仁僧堂の崩れ堀は、粗末

とは云へ、金城鐵壁。旅順要塞は破れても、此要塞は破れぬぞ。何程な美形の魔物が來たとて、此垣一重は鐵の、門より高いと泣かして見せる。何程怪物が忍んだとて、東夷の阿部貞任と、其正體を驅り出すぞ。怨靈退散鯉の一軸と目をむき出す世話はない。大體化物と云ふ奴は、陽を避けて陰に付くから、光明の無い處が彼の棲家ぢや。處が此僧堂は、光明赫灼活きた如來が鎮座まします。化性の魔物が寄付れるか、若寄付いたら即死をするぞ。此默雷の一喝で、大死一番くたばつた奴が何人あるか——光の大なる、日に如くはなく、明の大なる、月に如くは無しと云ふけれど、日月の光明なんか小さいものだよ。だから日に晝夜あり、月に盈虚ありだ。處が禪者の光明は晝夜もなければ盈虚もない。無碍光如來は己の事だ。不斷光佛は默雷ぢや。縁ある奴は順でも逆でも觸光せよ。忽ち汝が内魔を驅つて柔輓の御徳を與へて遣る。來れ來れ何んでも來れ。女魔、僧魔、學者魔、理窟魔、銅臭魔、圍碁魔、將棋魔、大黒魔、爵魔、位魔、別莊魔、藝者魔、ちごく魔、お妾魔、鬼魔、佛魔、執達魔、辯護魔、もぐり魔、

百三、内魔驅り盡して始めて安心

不拂魔、延期魔、執行魔、競賣魔、民事魔、刑事魔、裁判魔、魔と云ふ魔屬は隊伍して來い。此光明の下蔭に、正體見せず其まゝ置かうか。

我だの己だのと大切相に言うて居るが、此人間の身體と云ふ奴は、四大と五蘊の糊付て、六塵の境と喰つ付き合うて、種々の妄想を描いて居る。其處て人は、我を主として、六塵の境を賓にする。此主賓の境が妄想妄念の生ずる處だ。だから此妄想妄念を打破し去らんとすれば、先づ境の打破に勞するよりは、退いて我を破壊するに如すだ。此處が則ち「心生すれば萬法生じ、心滅すれば萬法滅する」所以だ。だと言つて其心法を打破し損ると灰身滅智の二乗に落つる。殺して而かも活す、是禪の活法なりだ。別に名けて心境一如と云ふのだ。

茶道も今では妙な藝術に爲つて來たが、あれも元は我が禪道から出た一方便だ。此頃頼まれた米田無諍居士の茶室用の扁額に「無主賓」と書いて遣つたが、茶を嗜む程の者に主賓を認める様なことでは、茶と云ふ茶の眞味は嘗められぬ。いま一枚は「舌頭

無骨」と書いた。法は舌に頼りて運轉する、法を運轉する時は、人間は勿論、聖人も佛陀でも罵倒し去る。さりとして此舌頭に人我や野心の骨が有つたら、墮獄の大罪を犯さねばならぬ。無諍居士も共濟會の知識で、始終演説や法話をする様子だが、どうか舌頭無骨で遣つてもらひたいものだ。

百四、佛とは糞かき籠の事

何とか博士、何とか高僧、お説を拜承すれば、四辯八音のお釋迦も跳て逃げ出す雄辯家、其功德實に廣大無邊、眞に一代の偉人である。……（果してどうだろ？）昔或一僧が雲門に向つて如何なるか是れ佛と言つたら、雲門は即答して、乾屎橛と言つた。乾屎橛とは糞かき籠ぢや。木曾の山中へ行くと、黒文字の木切て尿を拭うて側の箱に入れて置く。其置いて溜つたやつを、夏の五月雨に長柄川に流す。流した奴を美濃の下流で拾ひ上げて小楊子に造るとの話ぢや。又印度の奥の西藏では、糞の垂れ流し。

紙も入らねば、篋も使はぬとのことである。

嗚呼汚い、話ばかりでも汚い話ぢやが、衲がこんなにのべつ幕なしに糞の話をして來ても、そりや見て見よ、此の衲の口を、別に黄金色とも成つて居ないではないか。糞だらけの話をして、口が糞臭くもないとは何んだ。夫ればかりぢやない。歳が丙午の厄年ぢやと云うて、火事の話の演説しても、別に口から火事がてもせぬ。壬の歳に水の話をしたとて、鼻の下から大洪水も出ぬぞ。さあ此處ぢや、皆な堅固して遣れ。口頭が如何に達者でも、舌頭にどんな花が咲いたとて、畢竟何んの利益もないぞ。口唱の念佛や唱題や、陀羅尼百返古則千案、夫を何様巧く説いた處が、蟬が鳴くも雀が喋べるも、一つであるよ。人間の蟬や雀はあまり感心した話ぢやない。だから我會下の修行者は、萬事體達を要する。體達に至るには、不惜身命で遣らねば駄目だぞ。

雲衲の青年時代に才氣あるものは、最も危険だ。つまり「才子元來多誤事」ぢやから、此才氣を御し兼て、墮落するものが澤山ある。要するに、才氣に富む奴は交際に巧である。其處で修行未熟の中から、世俗でちやらほらと持て囃される。さうなると、自分では天下の大導師にても成つたかのように自惚れて、折角の修行を中廢する様になる。つまり小骨の固らぬ奴が天下の俗物等に教唆られて、世の荒浪に乗り出して見る。見ると存外思ふ様に行かぬから、例の僅か計りの才氣を振廻して、無理を遣る、權謀を遣る、惡友が出来る、惡事を覺える、愈々墮落の淵に沈む。昔謠はれた神童が、彌々凡物以下の品物となつて、天下の廢物となる。こんなことが世の中には澤山にあるが、我禪門の僧堂にもよくあることだ。

百五、南禪の梅垣謙道

南禪僧堂の梅垣謙道と云ふ男は、元叡山の學校に居て教相を修めて、禪教兩面に多少の覺悟のある男だが、近頃叡山避暑修養會と云ふものを發起して、四方に奔走して居る。此事業は我教界の方面から觀察して見るも誠に結構なことだが、併し一步退い

て、梅垣其者の將來を念うて見れば、實に氣の毒だ。——身を以て道に殉ずると云ふことはあるが、未熟の場合に遣つたことは何んにもならぬ。彼は教界有用の材だ。だから今の中は大いに慎重に修行すべきぢや。虎溪に引籠るか、毒湛の常侍になるかして、磨き上げるは、彼が刻下の急務のみならず、教界禪林の上から見ても、其必要がある。小骨の固らぬ嫩葉武者が力んで見た處が、畢竟一の谷の敦盛ぢや。具足羽の生えぬ奴が氣張た處が、巢立ちの雀ぢや。明治の熊谷の次郎は、白い顔して赤い唇して、軍扇ではない、香水入りのハンカチーフを振つて居るぞ。人界の鷲は大黒天の形をおした紙切に成つて空中を飛ばずに、金庫の中に隠れて居る。未熟の場合に事業にかゝると、得てして、此熊谷に組敷れたり、此鷲に打ち潰されるぞ。左様な目に會つた奴が、此處にも其處にも澤山あるてはないか。是の婆言は梅垣だけに與へるものと思ふな。凡て才氣を弄する弱輩の頂門の一鍼だぞ。

百六、五里霧中の迷兒

官吏でも、學者でも、事業家でも、其境遇などの小い中は、隨うて人我の見も小さけれど、所謂世俗で云ふ出世して境遇が大きくなつて、大臣とか博士とか紳士とかとなると、人我の邪見も亦大きくなつて来る。だから我々が現前に見る政治家でも、學者でも、紳士でも、世界の聰明伶俐は唯我一人なりと濟し込むも、一朝自己の利害問題に際會せば、自家の私利に迷ふ所から、其聰明も伶俐も暗黒となりて、全然て五里霧中の迷兒か、盲人の滅多打ちと云ふ様な亂雑なとなる。此場合には、平素腦に貯へて居る和漢洋萬卷の書物が、一字も活用をせぬ事となりて、論語讀みの論語知らずと成つて仕舞う。此處が乃ち其人格品性に依つて分るゝ處である。

元來何事を爲すにも、『度衆生』を根據とせねば、事業の精神は確立せぬ。度衆生と云へば、何だか線香臭い様な感があるかも知らぬが、衆生濟度のことは、圓頂黒衣の

徒の專賣權ではない。政治を執るにも、商賣するにも、書物讀むにも、是非度衆生が中心とならねばならぬ。度衆生とは、狭く言うても、國家の爲とか、社會の爲となる。佛法では、坐作進退語默動靜、食つても飲んで、放つてもばつても、當願衆生を本義本旨とする。國家の爲にも、社會の爲にもせぬ、學問や事業が何になるか。

此本義本旨の精神を基礎とせぬ大政治家や大學者であつたら、一朝、事の結果が自家の豫想に反すると云ふと、大狼狽の大周章をやる。其苦ぢや。彼等は名譽が目的である、拜金が宗旨である。だから其目的の名譽が得られなかつたり、其宗旨の安心が獲得されぬと云ふと、大煩悶を起す。煩悶の結果が惱亂となる。惱亂の果が、時に誤つて亂臣賊子となる。是等は畢竟最初の本心が度衆生から出ぬから、因果に安んじ、天命を樂むことが出来ぬからである。實に人生のことは一步の謬りて千里の差を生ずる。立脚と同時に慎む可きは、分脚にあらずやぢや。公心私情の差は、人を忠臣義士ともすれば、亂臣賊子ともするのである。

由來富貴を望んで富貴を得たものが何人あるか、富貴元來因縁の寓する處、たゞ欲しいと云うてさうおやすく手に入るものにあらず。其、手に入り難いものが欲しいとは畢竟何んだ……是れ這の一念抑も何處から來て何處に去るか……咄。

百七、志道禪師の愚問

六祖の高足志道禪師も、最初斷常見の外道であつたが、六祖に相見して、始めて正見を得た。其時の問答に、志道は涅槃經の四句の偈を擧げ來りて、是生滅法は色身、寂滅爲樂は法身とせば、色身滅する時四大分散す、是れ苦なり。法身も寂滅すれば瓦礫も等し、何んの體ありてか樂を受けん。又法性は生滅の體、五蘊は生滅の用なり。一體五蘊を永く寂滅に歸せば、是れ無情の物に同じ。若し夫れ此の如く一切諸法に禁伏せらるゝ時、何んの樂かある可きとの愚問であつた。

其處て六祖の曰ふには、汝は是れ釋子ならずや、何んぞ外道の斷常見を弄して、

最上乘の正法を非議するや。汝が所解の如くんば、色身の外に別に法身有りとなすが故に生滅を離れて寂滅を求めんと期す。是れ常樂の涅槃を以て却つて苦相となすが故に今汝の爲に涅槃の眞樂を示す。涅槃の眞樂たるや、刹那も生相なく、また刹那も滅相なし。此の生滅相の無き處即ち常樂なりと云ふべしと。

涅槃とは先づこんなものぢや。處が涅槃と云へば、何んだか、黄色い色した佛様が頭北面西で、臺の上で臥て居ることに限る様に感じて居る。畢竟生滅相の外に涅槃を求めて、涅槃と云ふ世界が遠き異國にても有るかの様に思つて居るには困る。夫に就いて、或る古徳が涅槃像に題して詠んだ偈がある。涅槃の消息に於て殆んど遺憾なく言ひ盡してある。

涅槃一會儼然在 看々大千沙界中
月上東山白毫相 日沈西海紫金躬
阿難含淚杏花露 迦葉顰眉楊柳風
八萬人天多少恨 黃鸝啼斷雨濛々

百八、火吹竹の故郷

各人一切の諸根は誰れの細工だ。神か佛か將た偶然か。斷見外道は偶然に歸し、常見外道は造物者に歸するも、共に畢竟妄想上の想像のみだ。造つた主は誰れ、火吹竹の根は遠い藪に在るが、入日の影は長くても己が足元から映して居る。燈臺もと闇し。諸根を造つた主はみんな己が心であるぞ。目が團栗ぢやとて、鼻が獅子ぢやとて、不足に思ふな。眼鼻の不合格は己が心の不合格の寫眞であるぞ。心の不合格とは妄念妄想の不調法ぢや。此不束なる妄想の摸型に入れられたから、團栗眼も出來れば、獅子鼻も出來た。穿鑿し來れば本來空ぢや。空の中で十二因縁の相續と變化が早いから有る様に見える。其見える所に、四大假和合や、成住壞空と云ふ様なものが成立する。成立したとて夫は妄想だ。物の長く續くを長江の如しとか、流水の如しとか云ふが、水は元來長いものに非ず、其分子は圓形とかである相なけれども、續相の早い業が長江と

も長流とも見える。見えたる處が妄想で、一つの水が流れ通しに流れて居るとは違ふ。彼は刹那に亘る壽命なく、生滅して居る。其生滅の早きだけ業を相續して見える。蠟燭が一本燃えて次へ點するが如く、濱の松風音ばかり、空に飛び行く浮雲の如く、刹那も住止なく、生住異滅しつゝある。六根識の働きは實に變幻不思議である。南禪山内の金池院の茶室は、八つ窓とやらて有名だが、人間の體は六つ窓だ。此六つ窓の茶室内には一疋の猿奴が居る。其猿奴の敏捷なる、實に端睨す可らずで、彼方此方へ面を出すことが殆んど同時である。其窓の名が眼耳鼻舌身意の六根だ。其面の出し處で、其窓の名を中の猿にくつ付けるから、眼識耳識乃至意識と云ふのぢや。然るに此猿奴甚だ不潔な奴で、不淨處を樂むこと銀蠅の如くてある。だから臭いものには蠅たかると云ふ諷刺が出来る。さて其不淨處とは何んなことぞ、好色を好むが如く惡臭を惡むが如しと支那の賢人は云うて居るが、佛法眼から觀ると、中々惡臭も惡まぬぞ。一例を擧げて見たら、何人にも否と云はれぬ確證があるぞ。夫れが何んだ、人間本來の不

淨は姪慾が張本ぢや。此姪慾が多くの人間を蠅にもすれば蟲にもする。此姪慾を充す道具が、公平に見て清淨であるか、又是れ臭氣のない處である歟、此穢い臭い處が好て耐らぬと云ふは、畢竟妄想煩惱の働きてないか。何日の中外日報の記者が「姪後姪事を思ふ心を以て姪前を誡め、食後食事を思ふ心を以て食前を誡め云々」との警語を吐いて居たが、此觀念は姪事を行する程の人には必ず有る可き感情である。若し此感情が姪事上の通有とすれば、姪事と云ふものは、確に穢ないものに相違ない。其穢いものが、穢くないとは何んだ。是れが正念正思惟だと云ふことが出来るか。思うて見れば情ない事をせねば、其慾望が満たされぬ。是が爲に不忠ものが出来たり、不孝者が生れたり、不道德漢が生じたり、身は國家の名門皇室の藩屏と力む人でも、此汚門を念うては、流涎三尺でお辭儀するとは、何んたる腑甲斐なきとであるぞ。此間も高臺寺の山内で、男女二人が抱合つて情死して居たに就いて、或る人が、彼等死ぬるまでも此醜態を演ずるとは何んだ、是等が即ち色情餓鬼の好標本である。實に思うても胸から

嘔吐が湧き出る感がある。併し此抱合情死は、醜は醜だが一方から観たら、畢竟内情を露骨に遣つた計りぢや、滔々たる天下の紳士名族、乃至僧侶も牧師も男も女も、其多分を擧げて皆な抱合情死の連中ぢや。女と抱合はなまや金と抱合ふ。上品な處が名譽とか、名利とかと抱合ふ。遣るなら高臺寺の心中の様にいつそ露骨に遣るがよい。是がまだ罪が浅いと云うて居たが、また一理ある熱腸談ぢやないか。

百九、佛陀の出世は義軍なり

物慾的人情と云ふものが、不淨を感せず、惡を惡と思はず、因果を撥無し、非違を弄して、妄想顛倒を樂んで居る様は、實に惘然の至りである。是に於て佛陀出世の不得止を見る。佛陀の説法は實に人世の絶大義軍なり。煩惱の火と妄想の風は、相待ち相迎へて佛性を燒き、人世を壞らんとす。恰も露國が毒手を東洋に伸して滿洲を一搏し、更に支那全土を威嚇して、爪を鷄林八道にかけ、滿清韓の吞噬功を奏せば、一氣猛然

我日東に迫らんとす。是に於て日本帝國は東洋平和の爲、遂に身命を賭して、一大義軍を起し、彼が膺懲に任じたり。是を日露戰爭の真相とす。

佛教の起原、また如此。佛陀は決して物好に八萬の法門は開かざるなり。然るに後世是を謬つて佛祖の眞意に反す。是に於てか終に後日の哲人をして、佛教の餘弊に痛歎を歌はしむるに至れり。故に佛法は世に妄想煩惱の絶えぬ限りは、形を代へ姿を變じて盡滅せざるものである。

露國と云ふ國は虎狼の國で、有つても有つても飽くを知らぬ國である。物慾煩惱もまた左様である。然れども露國人と雖も是を個人に就いて詮議すれば、仁慈禮讓の分子はある如く、一切衆生また本心本性は、無始無終に具有し居るも、唯虚偽の習氣によりて之を隠蔽し居れり。習氣は恰も水車の輪轉暫時も止む時なきが如し。古哲是を稱して習ひ性と成ると歎じて、第二天性の怪力を恐れたり。去れば現世にても彼の數犯の罪人は、監獄に入ることを觀る、恰も奉公人が自分の里元に藪入するが如くなる

は、迷惑の凡夫が六趣を輪廻して、地獄餓鬼の諸惡趣に出入するを苦とせぬと一般である。支那人は盥て茶碗を洗うて不潔と感ぜぬから、日本人が是を笑へば、彼は負けぬ氣で、日本人は、足で踐んだ塵埃だらけの敷物の上に食器を置いて、食事をするが、これは不潔でないといふことが出来るかと、反駁すると云ふ話である。習慣と云ふものは先づこんなものである。

其處て其習氣即ち習慣を破るには、大勇猛心が無くしては到底駄目である。維新の改革を見よ、佩刀を禁じた、髪は切つた、諸有舊慣を打破して、漸く明治の新政を興したてはないか。一國の政治を改めるのでも是である。況んや無始以來の習慣を打破せんとするに於てをやぢや。だから此際の利刀は小刀では駄目ぢや。快刀斷亂麻の場合には是非正宗の銘劍を要する。其正宗は此禪佛心に限るぞ。念佛唱題畢竟小刀細工に墮ちるぞ。此習慣を打破し去れば、天堂も地獄も方寸の間に存して、別處に在らざるを見る。若し修業地より言へば、照顧なり。照顧とは、克己の如く力を用ゐて、争ふ業

にあらず。此般の工夫最も意味の深長なる所なりだ。

百十、禪道的奮闘

近來流行の奮闘的なんかは、一寸聞いちや偉いものだが、禪定家から見たら、青いものだよ。おまけに克己の古語を拉し來りて、奮闘的克己なんかと力味んで居るが、克己の念があつて、どうして眞個の勝利が得られるか。柄は生れて竹刀一本持つた事のない坊主だから、劍術の術は知らないが、武藝も極意に到れば必ず勝たう克たうの念は無いに相違ない。此念がとれて亡くなるから、敵手の作略次第で、自由自在の變化が出来る。是非勝たうと思ふたら屹度敗を取るものだ。今も夫れと同然で、禪も是非悟らふと急つたら駄目だ。即ち奮闘的ぢやいかぬ。三祖の信心銘に「動を止めて止に歸せんとすれば、止更に彌々動ず」とある如く、克己悟らうては、始終動揺づめだ。乃ち未熟の劍客が眞劍勝負に出掛けて、刃の切先から身體一杯が戦慄すると云ふ話と一

對ぢや。克う勝うて敵の作略が見えぬから、自分から震へてかゝるのだ。故に悟らうてもいかねば、克う勝うてもいかねとすれば、然らば如何にしたら可いか、此處が何んでも相談場所ぢや。

斯く云へば何だか六ヶ敷聞えるが、なあに遣つて見れば別に六ヶ敷ことではない。日用塵勞の中でも、無雜作に遣つて除けられる仕事ぢや。此無雜作と云ふは、逆境にも何んとも思はぬ、順逆畢竟修行三昧に何んかあると蹴飛ばしてかゝるのだ。佛心玄妙好悪なんかと並べて見れば澤山あるが、そんな事が口に出る様な中は、外邊に彷徨いてをるぞ。永嘉の證道歌の「行も亦禪坐も亦禪、語默動靜體安然」の境遇に達せば前の境界に入るのだ。

古徳の偈に、無上の大涅槃は圓明にして常に寂照なりとあり。凡愚は之を死と謂ひ、外道は執して斷と爲すのだ。此無上の大涅槃とは、佛にあつても増さず、凡夫にありても減せぬもので、明々瞭々たるものだから、何人でも坐禪に骨折つたら、此境界に

到達するのだ。涅槃と云へば釋迦の死んだ時を指して云ふと思ふものもあるが、眞個の涅槃は死んだ姿の様な涅槃ではないから、大涅槃と云ふのだ。外道とて、正道を外れた奴は斷滅と見るか、又は常有と見るのだ。二乗の根機は半分の途上迄行つて足を休せるから、百里の途は九十九里を半とすると云ふ事になる。遂には無駄骨の折り損と成つて仕舞ふのだ。

百十一、法界吞了の口

斷見外道は因果を撥無して邪見の深坑に墮す。今の所謂哲學者も、斷常二見の亡者なり。六十二見の中には、基督教も有れば、天理教もある。此等の宗派は皆んな苦海沈淪の蛆虫ぢや。畢竟上述の無作の作たる妙用を得られぬ結果ぢや。

天象の無究なるは、凡人に測り知られぬけれども、去りとして天象を観て曆を作る位の一部分のことなら出来る。世の哲學者や教相學者は、此類である。天象の無究は宛

も佛法の無究である。故に法界は實に無邊なりだ。此無究無邊を一口に吞了するが禪者の面目だ。此面目を了したるを大機の妙用と云ふ。此處に達するには、所謂過量の人でなくてはだめだ。過量の人とは當世言ふ利口相な人物でなくて、所謂大骨折つて晩成する大機の人だ。古人は言下に悟了した例もあるが、今人は小賢いので、悟が遅い。此傾向は争ふ可らざる現象である。

公案は何の爲の用ぞ。蓋し未了の徒は、外境の爲に精力を奪はるゝ恐れあり。公案を拈提するには、是非六根の穴を塞いで、其漏出を禦がねばならぬ。だから公案は其半面觀に於て、精力漏泄の穴塞ちや。去れば實地に遣つて見よ。公案拈提の場合に、如何なる内魔が出て外魔が來ても、即時に紅爐上一點の雪と消えて仕舞う。一心を紅爐とし、公案を火として、日常不斷に烈火を貯へて見よ。どうして妄念の雪が此上に積むことが出来るか。併し雪は不斷に降るから、此烈火は寸時も消すことは出来ぬ。消したら折角の紅爐も雪の中に埋没するぞ。

昏憊とは、修業中の一現象だ。此場合には、武藏野の原か或はゴビヤサハラの砂漠を旅行するが如く、往つても行つても方角の分らぬ様などがある。此際に狼狽へたら駄目だ。左右を顧眄せず、一意専心一直線に進行するのだ。此時には、得てして吾は空見に落ちつゝ有るにあらざるや杯と心配が起る。若し斯んな一念が動いたら、武藏野の迷兒になるぞ。昨日坐つたから明日は悟れるか杯と退屈する様では、邪道に墮つるぞ。此時分にはまだ青いのだ。見よ柿や梅やの果實を見よ。未熟の場合に幾急つても駄目ぢや。青い時は何しても青い。急がず慌てず日光が果實を照す如く遣て居れば、何時か成熟の時期がある。其時期になれば、柿は酔ふ栗は罨ける。中の味は甘露となるのだ。

百十二、八識超越の工夫

此場合は、第八識を打ち超えたのだから、何んでも成熟してから入室するが可い。何んにも分らぬ者が無闇矢鱈に獨參しても、澁柿の青いものだから困つたものだ。まし

て悟りたいく、何日迄に斯くくと豫期する様では、到底駄目だから、大器晩成てやるが可い。瞑つたり喜んだり、思量し分別する者は何んだ、皆是れ自己である。又思量分別の能く解するものにあらずと思ふものは誰ぞ。矢張自己にあらずや。此自己たる主人公は佛祖よりも得られぬぞ。他の言葉を見聞しては無論駄目だ。實地に當つて見るが可い。言語と心縁と文字の三相を離るゝと知る者も亦唯自己だ。靈魂とかの斷滅不斷滅を疑ふ者も亦唯自己だ。直截指示を求るも亦唯自己だ。世間の上に出世間があるのだ。父母所生の鼻孔を失卻し、即ち法無生の境界を得ば、自己が天地と化育を同するのだ。

昔一茶と云ふ骨のある俳諧師があつて、山腹に草庵を結んで居たのを、加賀の前田侯が參勤交代の折、一茶が俳句を能くすると聞かれて、彼に面會したいから呼んで來ひとの命令が下つたから、早速近從が一茶の庵室へ招待に出掛けた。處が頼うとの聲に應じて眠を醒まし、眼を擦りく起き出て、誰だと言つたから、前田の家臣は主人加

賀より招待の趣きを申入れたれば、一茶はそんな處へは行かぬと斷つたから、再び加賀の御前様が御旅館へ直々に御招きになるのは其方に取つて非常の名譽であるからとて、同家臣が勸告した處が、一茶が立腹して、此方が招がるゝ理由が無い。左程に會ひたくば、此處へ自身が出て來るが可い。然れば逢うて遣はすが、乃公が出て行くことは斷然拒絕するとやつたから、其近從は前田侯に其ありし次第を言上したれば、夫れは一層と面白き人物だ。せめて何か俳句を書いて貰うて來いとこの命令があつて、謝禮金を携帶して、再び一茶に面會して、何か一筆を贈與せられよと懇願したれば、一茶は、

なんのその百萬石も草の露

と書いて與へたれば、家臣は菓子料の封金を差出したるも、一茶は固辭して受取らぬから、庵の片隅へ差置いて遣歸つた。後再び同侯が參勤交代の際、同家臣を遣はして見た處が、置いて來た金包が、矢張其儘に手も觸れずに在つたのには驚いて、早速其由を主人に告げたといふ事であるが、今日の禪僧等は、昔の一俳諧師一茶にだも若か

ざるとは、憤慨せざるを得ないではないか。

百十三、三世諸佛と一體無二

心にありといふ此心は、三世諸佛と一體不二である。若し二あれば即ち法不平等となるぞ。一體無二となれば、教を受け心に傳ふと云ふも、俱に虚妄と爲ると云つて、教の受くべきも、心に傳ふべきものもあるべき筈がないぞ。有ると思ふのは畢竟虚妄である。趙州の無字を常に提げて、無——とやり切つた以上は、便ち是れ閑靜語黙一體となるべき筈である。其處迄やらざれば役に立たぬぞ。

佛法の至妙は無二である。維摩が不二と云つたも同じ事よ。妙に至るとは心を悟るの人である。自身畢竟本來成佛である。これが手に入れば如實自在で、世界一の金持位な薄弱な者ではない。又如實安樂で、小僧が門跡様に成つた位ではない。如實解脱で、縛されたる者の解けた位でない。如實清淨で、風呂に入つた氣持位でなく、心の極清

淨に成つたのよ。それも窮屈な遣方でなくて、一々の天真爛漫、一々の明妙、一々の蓮花が水に着かざるが如くならざるべからず。

心を迷はすれば衆生よ。心を悟れば成佛よ。衆生は佛で佛は衆生よ。然るに今の學道人の多くは、自身を信ぜざる者あり。自心は天地萬物より無量無邊に甚だ貴重なのであると知つた位な事ではいかぬ。之を確かに信ぜねば、自心を悟る事が出来ぬ。自心を悟らざれば、自心の明妙を受用する事を得ぬぞ。昔法を重んじて毫も私情に囚はれざるより豪僧鏡面と異名せられ、終に本名と成つて仕舞つた、鏡面禪師が、初めて行脚に出た途中、師匠より發した處の書簡を披見したるに、寺が焼けて一大事である故、直に歸れとの事であつたから、其手紙を投げ捨て、師匠の主客顛倒したる行爲を遺憾に耐へやらず、師匠たる者が斯んな事を知らずるものでない、寺位が焼けても自心を悟る一大事の行脚には換へられぬとて、平氣で遊山翫水と出掛けて行つたと云ふ事である、僧堂に修行中の者は自坊が焼け様が、檀中が五月蠅く歸れと迎へに來様が、

斯んな事は世間の人情だ。修行中文だけは人情を捨て、掛らねばならぬ。決して音信もせぬがよい。年頭状もいらぬぞ。只管悟心悟道に骨を折れよ。難關を透過し去つて寺へ歸てからは、人情をも捨つる事は出来ぬぞ。其公私主客の區別を明めて置ねばならぬ。二乗の煎豆悟とて、植ゑても芽を出す事の無い様なのは無効だ。斷常二見の邪見に落ちては大變だぞ。斷見とは自心の本妙明性を滅却するのよ。常見とは一切法空を悟らず、世間の諸有を執着して、やれ金の、名譽のと追ひ廻してをれど、斯んなものは夢幻である事を知らぬ奴よ。役に立たぬ坐禪は心を以て心を休し、心を以て心を歇し、心を以て心を用ゆるから困つたものだ。眞正の坐禪は無分別でやるのよ。古人の言句に轉得せられては駄目だよ。何んでも骨折つて古人の言句を轉得せなければならぬぞ。

百十四、這裡の無門關

傅大士が、梁武帝であつたか、招がれて金剛經の講釋を望れた時に、講座に昇つて

意て見臺をカチツと一打した計りで、既に金剛經を講了せりとて下座した事があるが、本來、法は、一法として示すべきものもないのであるから、傅大士が見臺を一打したのが、早く既に方法に墮したのである。

這回本會に於て無門關を提唱せよとの望みであるが「關、這裡より入れ」て好いのだ。外に言ふべき事は更に無い。そんな事は講座に昇らぬ先にちやんと極つて居るのだ。去りとして来たからには何か遣らなければならぬげな。其處で衲は簡單な事が好きだが……此處に禪宗無門關と書いてあるが、此禪宗と云ふ語が衲は大嫌いだ。禪ではない佛心宗だ。此無門關は四十八則あるが、禪とは靜慮とて、散亂心を靜める計りが禪の本意にあらず。又禪宗の禪は、戒定慧三學中の禪定でも、六度の禪定でも無いのだ。大學生等が衲の室に来るが、禪のことは薩張り分るものでない。祖師禪は如來禪とは大相違で、諸佛超越の禪とも最上無上の禪とも云ふのだ。古徳が古塚に住すること勿れと誠めてある如く、守株しては駄目だ。禪のことは言はぬ處に花も實もあるのだから、

臨濟宗ではホンの提唱丈けをして置いて、公案の講釋は決して爲ぬのだ。之を言うて仕舞へば、屁の様に成り果て、何んの役にも立たぬ。然るに曹洞宗では、講釋的に微細に言うて聞かせるから、到底非常の禪傑は出来ぬのである。元來言葉に想へるは、丁度面へ塗つた白粉で、畢竟誤魔化してある。又た幾ら言うたとして分るものでない。冷煖自知でなければならぬのだ。前年天龍寺の夏期講習會に出席した時にも云うた事もあつた。夫は此寺は峨山が此通り立派に普請したが、元來峨山は衲と同主義であつたが、其人が生前折角立派に建てた處へ拙い學問的の塵芥を打撒かされては、彼は定めて怒るに相違ないから、以後は再び斯んな事て其處を汚さぬ様に爲て貰ひたいと云ふのだ。昔或大學者の宅へ禪僧が行つた時に書齋へ通したら、禪僧は其法衣の袖と裙とを捲り揚げてさも穢な相にして這入て來たから、主人たる學者が其無禮を咎められば、和尚の答には、斯くいろくの書籍が積んであると、其處此處に引つ掛りが出来て危険つて耐へられぬから、かうして這入るのだとやつた。實に此通りて、學問は駄目

だ。斯く云ふと又氣の弱い學生達は、學問を廢止にする様に爲つては大變だ。學問をする時は一生懸命に精出して學問するが好いのだ。

無門關だから元來無門で、門戸障壁の無いことだ。然し戸障子は何處へ行つてもあるてはないかと云ふだらうが、これは心中を掃除して懸る事だ。本來出入無して、鳥の空中を飛び過ぎた處と、水鳥の飛び立つた水の面には、俱に迹なきが如くに、出入が出来たら夫て好いのだ。然るに何人も邪魔せぬのに出入が出来ぬとは變なものだ。又出入すべき資格が出来て居らぬのに、濫りに出入する者があるから、無門の處へ已むを得ず關所を設けた。實は設けたのではなくて、設けさせたのだ。昔箱根の關所を始め、何處の關所でも之を通過するには、割符を合せてからでなければ、通れと許さぬものだ。支那でも函谷關と云ふ關所があつて、第一番の鷄鳴を告げざれば、何人たりとも門を閉鎖して決して通さぬことに爲つて居たのに、或時鷄鳴を眞似て偽聲を出して、關守に眞正の鷄鳴なりと誤信させ、門を開かせて通過した者もあつた如く、禪宗では

此關を假りに設けて、こんな詐術で通過せんとする者を充分吟味せなければ通さぬものだ。其割符は師家と學徒との見處がびつたり符合する時機を言ふのだ。天台にも教と觀とがあつて、教相計りては片輪として、最も大切に觀心をさした。だから眞實の天台僧なら、是非此觀心に一生懸命骨折る筈だが、今の天台坊主に、觀心の出來て居る者があるか、甚だ怪しいものだが、何れにした處が、此教觀杯は屍骸の研究であるから、無駄骨を折るに過ぎぬのだ。仙峴和尚の歌の通り、「行脚して關所通れば又關所五十三つぎ馬の尻のかず」て、禪定は一々の解脫を経過するのであるが、越すに越されぬ大井河と云ふ難關をどうする。さあ此處で鐵鎚の大力量がなけねばならぬ。炮烙千枚鐵鎚一挺と云うて、一處徹れば千處萬處一時に徹る底であるから、鬼に煎餅でばりく／＼とやつて退ける。身心脱落脱落身心だから、元の通りて出入のあるべき様は無いが、尙ほ此上に更に一重の關があるのだが、三世の諸佛でも歴代の祖師でも、如何なる聖人でも、この一處だけは、決して通すことは許さぬのだ。今日は先づ／＼此處ら

て止めにするのだ。(大雲院夏期講習會の發會式にて)

百十五、迷悟の語響

服藥も空腹の時には効驗が著るしく感ぜらるゝ様なもので、坐禪するにも先づ心を虚却し去つて、知識の指示に服すべしだ。悟道したとて、雨天が晴天にもならぬば、悟らぬとて、晴天を雨天と見る譯ではない。だが悟者未悟者が異口同音に、好天氣を好天氣と呼ぶ、其話中て悟者と未悟者の響がある。唯だ其一響、夫れて以て知識の目にはちやんと鑒定が出来る。

高等官吏と云へば、相當の智識が無くてはならぬ。其位の智識あるものなら、世間向の仕事は大概眞似が出来るが、唯だ此の禪の一事に至つては眞似が出來ぬ。其處で近頃は、賣僧坊主を自分の別莊杯に招いて、未熟の禪話を聽聞して、盲目の垣覗きの横着を遣つて居るものがある。

凡そ道を聴くには、就いて聴くを要す。夫れを何ぞや、自分が上座して居て師の説を求むるなどは、抑も求法の根本から間違つて居るが、特にそんな俗物の招待を有り難がつて、坊主頭を顔がして出掛けて行く坊主根性の淺間敷には、嘔吐が出る心地がする。そんな盲人が一廉の目明の様に誤認して、禪だの佛敎だのと、えい加減な妄誕を弄ずるから、正法が興起せぬのだ。

一盲衆盲を曳くとは、つまり斯様なことだ。處が此盲人近頃は中々人氣が好いとは残念な事だ。衲にして若し高等官吏なんかの邸宅から招かれる様なことが有りとするも、衲は寧ろ穢多村へ往つても、そんな不淨處へは御免を蒙る。官吏や長者の汚れた手で造られた御馳走よりか、貧者の差出す濁酒が餘程清淨で有り難いぞ。處が其貧者を避けて富貴の魔窟に追従する様に僧風がなつたから、そんな長老どもは偽知識なりと衲は一呵し去るのである。

おまけに斯る高官富豪の前に出た時は、此生臭坊主、全身から膏汗を流して、精一

杯力んで居る。道に精力を注ぐは結構だが、夫は畢竟對機に由るのだ。處が彼の腰拔坊主の説法を難有がる高等官吏なんかと云ふ奴は、高く積つて一錢九厘の品物だ。其一錢九厘の品物に向つて精一杯膏汗を流してかゝるとは、何んの状だ。其處で一錢九厘先生、ダースにしても一貫文にも足らぬ坊主の賣談を聴聞して、禪語の一つも囁ずる様になると、是まで不淨の御馳走でもして置いた禪坊主は早速の解雇で、今までのお師匠様まるで傘一本で放逐さるゝと云ふ有様、夫から一錢九厘どう遣るか云へば、俄に偉く成つて、釋迦か維摩で、頻りに部下など集めて、半可通の禪の無茶苦茶説法ちや。處が其お釋迦の分身、維摩の再來と自任した大家、何か一朝事あれば、其一錢九厘例によりて一錢九厘、賄賂もとれば腰も抜かす、鼻毛も伸ばせば涎も垂れる。生死自在は愚か、情慾一つも自由によらせぬと云ふ體たらくて、窮境に際せば敢て揚言して心機一轉の下に節操を賣ると云ふ有様、夫んな奴等に禪道達人の看板を掛けられて耐るものか。

一錢九厘の道場を張る賭博坐禪、其賭博者流は畢竟燒物の金巾猫に紙袋の連中だから、時たまには眞個の達人明眼の知識に會うても、之を看破することが出来ぬ。だから盲人蛇に怖れず、相手が自分より數層も百層も乃至雲臭い程上にあるも覺らて、相變らず半可通を振廻して居る様なことが折々ある。實に笑止千萬お臍て茶の沸く有様だ。

百十六、無類の侍者

昔嚴陽尊者と云ふ徳者は、二空の侍者を連れて歩いたとの話ちや。其侍者は猛獸の虎で、一疋を大空と呼び、一疋を小空と呼て居たさうな。人に害意なくば猛虎と雖も猶和融し來りて、狎れ親しむこと斯の如しだ。其處で衲も猿の人真似て一番鼠の懷柔策を講じつゝある。全體鼠と云ふ奴は、非常に人類を恐怖する奴ぢやから、幼い時から育てたらいざ知らず、ひとり前の鼠と成つて、一通りの悪作をする老功の奴は、中々人

に狎れ親まぬ。だから衲は一つ試験的に氣長に掛つて遣つて居るが、其遣方は先づ飯粒を庭前に撒布して置くのだ。さうすると、鼠先生の爲めには意外の天祿が降つた様に思ふてか、頻りに出て來て周圍を偵察する。最初は中々びくびくして食にかゝら無かつたが、段々と狎れて來ると、何時の間にやら落付いて喰ふ様に成つた。夫から衲は漸々工夫をして其撒布方を變更して、衲が居る座敷へ接近する様にしたが、時間の経過と共に彼等の恐怖も次第に薄く成つて、今では悠々寛々と喰つて居る。初めは數間も先きの庭先に撒らしたが、此頃は次第に距離が縮少して、縁下にまでになつたから、次は縁の上で暫く遣つて、夫れが成効したら、今度は衲の膝頭から上にまで引き付けて見る積りぢや。

嚴陽尊者は、二疋の虎侍者であつたが、若し衲の遣り方で成効すると、中々二空處ではない。今でさへ元一疋しか出なかつたが、段々殖えて早や五疋に成つたから、思ふ様に往つたら、數十百疋の侍者が衲の周圍でちよこ／＼するかも知れぬ。さうなつ

たら随分厄介な話だらう。處が面白いな、衲は最初鼠丈けを試験する積りて掛つた處が、後日には雀まで遣つて来て、鼠と一緒に拾ひ食ひをして居る。其處で衲は鼠雀の賢愚に就いて試験をして見た處が、眼は雀の方が遙に鋭敏だが、鼻の働きは鼠の方が敏捷である。つまり鼠の智識は無論雀以上だから、近々には衲の感化を受けて、衲の膝を上下して遊戯するに相違ない。昔の大徳は、虎を侍者にしたが、今日の衲等には先づ以て鼠位が分相應かな……呵々。

百十七、洋人の根氣

公案工夫は日夜不斷に、何處々々迄も繼續してやつて退けねば駄目だ。若しも寸時たり共之に油断せば、其者は死人も同様となるのだ。だから何んでも今生で遣り切れぬなら、生々世々懸つて遣るが可い。西洋人が何かの發明を爲んと企圖せしからは、自分一代で出來ぬ時は、子々孫孫に其意志を傳へて、終に發明を貫徹さす美風があると聞

くが、誠に結構な事だ。物質の事でさへ斯く骨を折らねばならぬのだ、況んや精神界上最大微妙なる佛心を發明否發見するに於てをやぢやから、生々世々懸つても徹底さすが可いのだ。悟道に時節あると思ふな。又群を驚かし衆を動ずる奇蹟があると思ふな。そんな事は死んだ者から屁の出る様な事がないと一般ぢや。自然に佛をも祖をも生をも死をも疑はずして、一切不疑の地に到ることを得るのだ。其處が佛地だ。其佛地上には迷悟生死、有無も無く、涅槃も般若も佛も衆生も無く、亦斯く説く者も、此の如きの語をだも受けず、畢竟じて之を如何と云はゞ如是如是だ。

富貴の爲に少しも羅籠を受けざるに到るは、永き願力所持の然らしむる處だ。一大事に於て念々退轉せず、此大事は法華方便品に唯此一乘法のみあつて實なりであるから、無二亦無三であるから、餘の二は則ち眞にあらず。孔子が朝に道を聞いて夕に死すとも可矣と云はれた言も、公案とすることが出来る。此場合に到つては、吾が道は一以て之を貫くと、云ひ去るべからざる處があるのだから、自信自悟すべきが一大事だ。

此場合を只揣摩したり、口頭で誤魔化したりするは、甚だ不可だ。今の曹洞坊主等が古則を陳列して儀式の問答を爲す如きは、實に滑稽千萬で、そんな事は妙處どころか骨髓どころか、皮相だも能く透して居らぬ。つまり奴等は口頭で誤魔化して居るのであるから駄目だ。彼等に接するには、古則の禪語を以て商量せば、中々輕妙な答をするから、皮相からは悟道して居るものゝ如くなれど、語を換へて世俗の言葉で以て平易に之を試みれば、一として答ふことが出来ぬ。つまり奴等は眞正の道力が無いから、變化を受けては、忽ち化けの皮が顯はれて仕舞うのだ。

是の如き人を指して釋尊は増上慢の人とも、謗般若の人とも、大妄語の人とも、斷佛慧命の人とも謂うたので、こんな奴等は千佛出世すとも、懺悔も通ぜぬ類であるのだ。然るに近來の人心が兎角形式に走りて、實地の練修を忘るゝから、曹洞禪の如きが意外に歡迎されて居る有様だが、しかし之は目下の燈明で、今に光を失はねばならぬのだ。……アツハ、……。

百十八、布薩會

此程布薩會を執行した事だが、此布薩の名稱は梵語其儘で、漢譯では、清淨住だ。清淨住とは所謂梵行で、印度では一ヶ月を、満月の十五日を境に、黒白に別つてあるが、前の十五日が白で、後の十五日が黒である。其處で月の十五日を以て布薩會を修して、佛法者が清淨住に向つて前半の白期が之に合格して居るが、偕て後半の黒期は如何にして之を完うするかと反省する様にして居た。だから此建仁の開山千光國師即ち榮西禪師が豫言して、七月五日に遷化するに際し、其前六月卅日に大布薩會を執行して、清淨行の訓戒を遺されたことがある。此時の用僧中には、日本曹洞宗の開山道元禪師も参加して居られたが、禪師の年齢は、其時十六歳であつたとの事だ。昔の事例を調べると、同會は僧界の爲には大事の法會であつたから、毎月定例として嚴修した様子だが、當山に於ては、毎年一回七月三十日に行ふことに成つて居て、

その當日には、師資大衆一切が、一年中の清淨行の大掃除をする事に成つて居る。此儀式の厳正なるは、實に格別にて、三伏鏢金の苦熱の中で、淋漓たる汗を拭ふ事もせず、左右を見向かず、一舉手一投足にまで注意して、如法の古式を遣らねばならぬから、若し其會上の用僧にして、日常平生に其嗜なき時は、到底森嚴なる式場に立つて、複雑なる儀式を執り行ふ事は出来ぬ。畢竟本會の式は、普通の技術が自然の練習によりて得らるゝと違ひ、全く精神を以て遣らねばならぬから、其用僧たる者は、終に平素に於て清淨行を把持せぬ以上は、斷じて此役儀を勤めることは出来ぬのだ。處が人によりては、布薩會の式が、小笠原流の禮法に似て居ると云うて不思議がつて居る人もあるが、似るは似て居ても、似たる中心が違ふ。即ち小笠原流が布薩に似て居るので、布薩が小笠原流に似た譯ではない。否似ちよるが無理か、似ぬが無理か、抑も小笠原流の禮法の本家本元は、全く此布薩會の式に胚胎して居るのだ。乃ち布薩會が小笠原流の本源で、小笠原流は布薩會の式の別身であるのだ。

さて斯く言ふ計りでは何んだか我田引水の様に見えるから、一應其理由を話すこととすれば、大分遠い昔に遡る必要があるが、此建仁寺山内の禪居庵と云へば、誰でも承知の彼の摩利支天安置の寺だが、此寺の前身は支那に在つたのだ。夫は同院の開山大鑑禪師が支那から將來した寺で、此禪師は自ら稱して大智禪師即ち百丈和尚の再來と言つた程の人物であつたから、無論相當の力量の有つた人に相違ない。處が此禪居庵は、例の百丈山に深き因縁の存する寺である。處が其因縁が、期らずも上來云ふ所の、禮法古式の泉源と成つて居るのだ。

百十九、小笠原流の元祖

大體支那では、禪坊主は律宗の寺に客居して、獨立の寺坊に住持せなかつたのだ。其理由は、釋尊以來僧伽は樹下石上で以て、一處に止住せぬと云ふ生活法であつたからだ。然るに世が段々と複雑と成つて見れば、どうも樹下石上では薩張纏りが付かぬと

云ふ處から、初めて百丈山の一部に禪坊を新設した。夫れが乃ち禪居である。處が彼の大鑑禪師が此建仁寺へ來られてから、今の禪居庵を建立しての大氣焔に「吾は之百丈の再來なり。禪門凡百の儀式、吾來りて之を日本に傳ふ」と。

然るに今を距る六百年の昔、禮法の本家を以て目さるゝ小笠原氏の祖先某が、信州諏訪にありて此禪師に非常の歸依をした結果として、遂に師に就いて布薩式の傳習を受けた。然るに小笠原氏は何んとかして之を日本の民俗に應用したいと云ふ希望から禪師に協議して、所謂一般の在家に適當なる儀式禮法を創定したが、是が所謂今の小笠原流である。

我建仁本山では、小僧の時分に此布薩式を稽古さして置くことに成つて居るが、其用僧中の白槌役を勤むる者は百日間の禁足で、毎日三回宛稽古をしたが、足の運歩が悪いからとて、鐵棒で脚を打擲された程で有つた。だから昔は布薩の本式に際して、其用僧中一寸でも間違ひがあつた時は、管長より百日の閉門を命ぜらるゝ事になつて

居たのだ。夫であるから、此布薩式は社會凡ての儀式禮法の模範に成つて居た爲、能狂言師や、亂舞師、茶の宗匠等が之を手本にしうとて、例年拜觀に來たのであつた。然るに之とても今の茶の湯の如き、趣意精神が蟬脱して、ほんの虚儀空式と成つて仕舞うては大變だ。どうも建仁山内も、今の如く儀式僧と禪堂僧と別々になつて居ては面白くない。是非内外相應、眞影一致でやつて貰ひたいものだ。

百二十、一厘の難關

十分のことは九分九厘で尙半ばである。禪もまた九分九厘まではどうかかうか遣つ付けられるが、さて後の一厘が難關だ。此一厘を透過せざれば禪の禪を得られぬ。つまり日蓮が禪を觀て禪天魔と熱罵したも、此九分九厘の小成に安んじた木葉天狗の境界だ。此難關を透過し去れば、眞個の圓融無碍で、宇宙何物に接しても、夫れを自由自在にされぬと云ふ事はない。其境界を云へば、儒即佛、佛即儒、僧即俗、俗即僧、凡

即聖 聖即凡、波即水、水即波だ。幾多の個々の釵釧を集め之を鎔冶して、一塊の金と成すが如く、心性のこと我に在りて他に在らず。一超直入如來地の消息乃ち禪門者流の面目だ。

在昔大慧禪師は、一千七百の大衆圍繞の中に在りて、法門の應接に忙殺を極めた様子である。然れども萬縁休罷の禪師は、忙中尙綽々として餘裕あること、恰かも閑居無作の人の如く、忙中に處して一念を動ぜざりしと聞く。今の衲は亦大慧會下の大衆を有せざるも、堂外の居士や大姉や其外來客の應接や、定例の提唱や、折々の揮毫やを算し來れば、先づ寸暇なしと稱す可く、朝は大衆に先んじて離床し、夕は大衆に後れて臥床に入る。左右時に衲が多忙を慰問す。然れども今日の衲は、幸に萬縁休罷の餘地を存する身なれば、忙中の閑地敢て他人が氣の毒に思ひ呉れる程でもなしだが、斯く云へば何だか衲が駄法螺でも吹くかの様に邪推する人がないとも限らぬが、夫れは前の難關を透過して、衲と同一の境遇に達せぬ人の妄見だ。禪門の下にはそんなつまらぬ遠慮

や會釋はなく脱臼だ。だから難關透過の士が有つて、衲が卒直の言説を聞いて呉れたならば、それこそ拍手喝采然矣々々と言ふに相違ないが、さて悲しい哉、當今此境遇を言下に會得する人物が、算し來りて曉天の殘星も管ならぬのだ。だから卒直不修の言説も、時としては高慢的の駄法螺の様に受取られるが、境に入らねば境が判らぬから、衲の云ふ處が駄法螺と思へば、試みに衲の爲た丈の修行を仕て見るがよい。成程さうだ、如何にも尤もだと納得が出来て、今は法螺と聽いた言語を、今度は金口の眞説として自ら喋べる様になるに相違ないのだ。

百二十一、繩つきの幽靈

衲の處へも随分いろんな怪物が來る。中には紳士とか云ふ戒名のついた亡者や、高等官と云ふ繩つきの幽靈がある。奴等の心術と云ふものは、まるで昔噺にでも有り相な状態で、肉體肉慾に不足がなくて、旦那様ぢやの、殿様ぢやのと、物慾煩惱の眷屬

連から、天麩羅的につけあげて貰ふ代りに、無形の生活は何時もかも、不足不満の妄念煩惱の悪魔から呵責づめた。

名譽が欲しいと思ふちや頭を下げ、金が惜しいと思ふちや悪事を企む。縦令表向法律の罪人には成らぬにしても、閻魔の廳の淨玻璃鏡に懸けたら、窃盜強盗人殺火付追剝何んでも映る連中ぢや。そんな汚穢穢ない反吐の出さうな根性を下げて、紳士だの官吏だのと威張つて居るが、此世の縁が一度切れて見よ、落ち着く先は自家製造の地獄の外はないぞ。

其くせ奴等は、無常の刀風が時を擇ばぬ激烈の消息を忘却して居る。どんな豪傑でも英雄でも、無常の殺鬼には打ち勝つことは出来ぬぞ。支那四百餘州を一客にした秦の始皇は好き手本でないか。彼はまだ死と云ふことが恐ろしかつた爲、長生不死の薬が東海の仙島に在ると聞いて、徐福と云ふ道士を我日本に派遣したが、派遣された徐福も死んで、自分の始皇も消えて無くなつた。だから肉體肉慾の満足で、人生が満足

されるならば、秦の始皇などは何んにも云ふことはない筈ぢや。處が假令、一天萬乘の富貴を以てしても、眞個の満足を獲得されるものでない。況んや始皇の財産に比すれば鼻毛一本の數取にも足らぬ程の財産を持つて、紳士で候の、天子の尊に較べては乞食非人を去る僅少の差しかなき位官を鼻に掛けて、力味んでをる官吏社會の根性の小さい事に至りては、實に氣の毒とも可愛相とも譬へ様のなき次第である。

何故彼等は産を以て産に制せられず、位に居つて位に縛せられざる、大自由大自在の活財富貴を得て、其財産と位地を天下國家の爲に運用せぬで有らう。有田憂田、有宅憂宅は、佛が迷人の状態を憐愍した悲鳴ではないか。想うて見れば奥齒が鳴る様に齒痒き感じがするのだ。

百二十二、灰頭土面

なに禪坊主共は國家經濟上一口でも生存を許す必要がないとな。吹いたぞく中々

吹いたぞ。面白い面白い。ちやが國家の經濟とやらから觀て生存の必要を認めぬ奴が、禪坊主だけだろるか。おう然り今の禪坊主なんか打さ殺して瓜畑の肥料にしてよい様な奴ばかりぢや。だから強頂令とか云ふ先生も、黒金張の腕があるなら、何んと一番己れの僧堂へ出掛けて己れが大眾を打さ殺しては呉れまいか。大眾は愚か斯く云ふ此黙雷でも、場合によりて一つ先生の鐵槌を受けて見るのだ。

處かな、是は三韓征伐の砌り、朝鮮は蔚山の籠城中南蠻鐵で鍛い上げたる段平で候と、由緒八釜敷斬馬劍でも、ひよつとすると芭蕉一つも切り落せぬ鈍刀がある。此黙雷の細首位は、腕前次第で竹光でも木刀でも落ちもするが、腕が牙えぬと三條小鍛冶宗近や、相模五郎正宗を持つて來ても、頸の毛一本も切れるものではない。昔は源家相傳の銘刀に髯切と云ふが有つたと聞くが、此坊主頭は髯も髪も切る世話はない。建仁僧堂も近來寂寞、全體の大衆三四十にも上らぬが、併し水吞百姓の瘠畑の西瓜位はごろくして居る。誰でも彼でも、腕次第撰り取り勝手に試めし斬りにさするのだ。未

熟なりとも僧堂坊主は、敵に對して背は向けぬ。昨日入堂の若所化でも、胸を披いて矢表に立つ位の勇氣はあるぞ。なんと一番此坊主共を塵にする勇者があれば、夫れは御國の寶であらう。そんな勇者に殺されたら、己が大眾も成佛する。夫が出来なきやたゞの駄法螺だ。そんな駄法螺を舌端筆頭で誤魔化す位の勇者では、矢張國家の經濟上から生存の必要を認めぬかも知れぬ。

とは云もの、衲が餘韻否餘尿でも讀者より瀏覽の光榮を受けるのみならず、御入念の批評まで寄せらるゝとは、近頃以て法喜の至りである。處が生存上必要不必要の問題は、禪宗坊主も然りだが、他宗他門の坊主どもも、生存の意味を穿鑿すれば其結果はとうなるのだ。生存の必要のないものが生存して居る今の佛法だもの、教法の不振も無理はない。其處で強頂令先生か衲に忠告するに、建仁僧堂を人力車の帳場にして、其大眾を車夫にせよ。而して衲自身は親分になれとの事だ。面白い面白い、至極面白い。併し之ばかりではまだ駄目だ。衲自身でも挽子になる、車夫は愚か太鼓持にでもなる。

全體禪坊主の境界には「灰頭土面」と云ふことがある。乃ち頭に灰を被ぶり、面に泥土を付けて働くと云ふことだ。是を遣らなくちや駄目だ。然らば修行未了の僧堂坊主を驅出して、早速其通りに遣らしたら可いかと云ふに、どうも修業の順序としてさうは行かぬ。何故と謂つたら、夫れが動機となりて却つて本分の立脚地を喪失することがある。則ち車夫となれば車夫に甘んじ、幫間となれば其幫間が本業となる。だから灰頭土面は悟後の人にあらざれば、未熟の徒輩に強ふことは出来ぬ。然れば悟後に於てはどうなるか、其處が即ち「異類中行」ぢや。異類中行とは觀音の即現應化と同一ぢや。人に會へば人となり、男に會へば男となり、女に會へば女となり、乃至學者不學者、賢者愚者、羽毛鱗介、一切の物に應じて攝化を自由にする處、即ち是れ異類中行ぢや。僧堂生活は則ち夫れに達するの道程である。

百二十三、心頭 の 消息

抑も公案拈提の心頭 の 消息は如何。人若し汝に熱鐵丸を喰へと云はば、其人は未だ之を口にせざる前に心神惱亂の苦痛ある可し。昔源九郎義経は、火に成つた赤金の鹽を持たされて神色を變ぜざりしとて、後世英雄談の中に算へられて居るが、手に燒鹽を持つてさへ夫れてある。況んや此烈火の鐵丸を口にする程の勇氣と、其苦痛以上の消息が公案拈提の際であると云へば、實際を透過せぬ門外漢には、白痴威しの駄法螺としか聽けぬのだ。併し夫は云ふ人の咎でなくて、聞くもの、未熟の罪である。

熱鐵丸を口にすれば、口中爛れ齒はぼろ／＼となるぞ。公案拈提の折りは、周圍の壓迫、其峻嚴なる殆んど言語に絶して、進退維谷の場合がある。是れが百日とか一年とか云ふ短日月でなくて、何時此苦境を脱するとも豫測が出来ぬから、若し導師に其人を得ずして半可通の哲學者の様にやれば、神經衰弱て馬鹿になるか、或は過度の心勞で發狂するより外に仕方がない。然れども我禪門は古來之が専門であるだけ、滅多に人を誤つてそんな不具にすることはせぬ。其處が乃ち師家としての價値の存する處

である。

百二十四、長生不死の靈劑

長生不死にどたばたした秦の始皇も、無常の殺鬼には嚙殺された。其お帥匠の徐福と云ふ道士も、閻魔の應の被告人となつた。現世では國王と威張つても、娑婆で大金持と力味んでも、心に不生不滅の寶の無いやつは、死んださきは穢多非人にも劣る地獄行きぢや。そんな危い生活をして居て、長生不死などと藻掻いたとて何に成るぞ。長生不死は古來聲ありて實はない。秦の始皇ほどの英雄が其處へ氣が着かぬとは何んだ。處が今の世の中には、もう秦の始皇は居らぬで有らうか。周末の列國を併呑した上に萬里の長城まで築造して、威を匈奴に振ふたと云ふ程の始皇はどうだか知らぬが、秦を亡すものは胡なりと云ふた諷言を誤解して、こんな馬鹿な眞似をする程の太い始皇は兎も角も、世には我子を待つて我家を亡すまでもなく、我惡業で我身を亡す小始皇

は澤山あるぞ。威を匈奴に振ふ程の大人物否大妄想家は、始皇前後に始皇なしたが、別莊位を造つて威を隣に振ふ位のひよつとこ始皇は澤山ある。現に日露戦争で國民の多數が血税を拂うて妻に別れ子に別れ、血の川を造り屍の丘を築いてやつと國家を危機一髪の際に救ふたと云ふ、前代未聞の危い中で、御用商人とか云ふ奴等、此犠牲的の國民を更に私利私慾の犠牲として、邪利を貪つて儲けた金で、隣には戦死軍人の遺族の涙が乾かぬ中に、やれ藝者を落籍して妾とする、やれ地所を求めて別莊を造るなんかと騒いで居て、死後の用心も思はず、子孫への餘福も顧みず、ふざけた眞似をして居るが、其別莊は阿房宮と同一、忽ち債鬼の一炬に付せられて仕舞ふは知れた事だ。どうだ今の戦後長者、今の木葉長者等は、今の中に覺悟をしないか。覺悟次第では随分此の獸雷が相談に乗つてやる。別莊が欲しけりや、十萬億土の彌陀の淨土にや七寶莊嚴の不朽不壞の別莊がある。寶が惜しけりや淨土へ往け。命が惜しけりや、淨土へ往け。彌陀の淨土は無量壽ぢや。其處へ往きたさや何時でも遣つてやる。此處で見ただけ

りや何時でも見せてやる。此別荘は國民の怨を買ふ氣遣がない。何んと一番此默雷の投ける、不生不滅の妙術を望む相手はないか。

百二十五、迷悟の別

眞個大臣の器たるものは、朝廷に立つても田野に在つても、始終劃一にして功名の爲にも移されず、富貴の爲にも奪はれず。亦功名富貴を輕んずるに意あるにもあらずば、道の在る所は法として是の如くなる故だ。趙州老漢は云ふ。諸人は十二時に使はる、老僧は十二時を使ひ得たりと。其處て今の衲は二十四時間を使ひ得たりと云ふのだ。只迷悟の別は使ふと使はるゝとにあるのだ。公案工夫は打ち込んである釘を抜く様なもので、古釘が錆び附いて居るから、之を抜く方便としては却て之を緩める爲に尙一層奥深く打込んだり、前後左右へ動搖させたりしてから抜くのである。然るに下手に早合點するものは、禪と云ふものは古釘を打込む様なものだとか、前へ引張るも

のだとか、左へ傾けるものだとかと誤解することが多いから、飛んだ禪天魔とても云ふ妙な化物が出来る。然るに半可通の人達は、師家の方便の在る處を知らずして、其禪臭きを嘲けるものがある。斯は師家の禪臭いのは諸人の臭みを抜くには、己自身も卒先して其臭中へ投ずるの必要あるを知らぬからだ。恰も油抜きの方法として、油が物に浸み込んだ時には、油を以て製した石鹼の力を借りて之を抜く如く、衲等が禪臭くして居るのは、有縁の衆生の臭味を抜いて遣る方便として、不得止之に混じてをるのだ。菜根譚の一則に斯う云ふ事がある。

糞虫至穢變爲蟬。而飲露於秋風。

腐草無光化爲螢。

而耀采於夏月。

固知潔常自汚出。明每從晦生也。

蓮花は淤泥を離れず淤泥に染ずだが、而も蓮は必ず淤泥濕地に假住居するではないか。

百二十六、他宗僧侶と禪

禪も遣るなら、他宗他門で惡癖を付けぬ中に着手するがよい。どうも眞言僧杯が阿字觀とか日輪觀とか云ふものを遣つて、邪觀に陥つてから遣りかけても、大體が無氣力無精神であるから、到底眞正の禪味を嘗めることは出来ぬ。是までとても各宗の僧侶として衲の許へ出掛けた連中も少くは無いが、どうも永續がせぬ。永續がせぬから徹底杯は思ひも寄ぬ。其中で(參禪者)一番少數で見込の無いのは、日宗僧と眞言僧である。今度仁和寺へ出た土宜法龍も、どう思つたか或時前田誠節を介して、禪を遣つて見たいから宜敷頼むと云うて來たから、彼の人物としては、随分永續の仕さうもなきことを云うて來たが、どんな風の吹き廻しかと思つて居たら、果せる哉さう言つた切り夫れなりになつて仕舞つた。どうして禪が慰み半分て遣られるかへ。思つて見るがよい。直指人心見性成佛、此身此まゝ活きたる佛に成ると云ふ活きた修行をする禪ではないかへ。

眞言坊主等が辛抱が出来ぬも無理はない。曹洞坊主でも本調子に遣る奴は實に少數

である。衲の會下にも以前は洞宗僧が十數名も來て居た事があるが、根氣の可い奴で先づ二三年の辛抱が出其ぬ。こんな奴は衲の會下では實に糟粕的の滓だ。處が思ひきや、そんな糟粕坊主でも洞宗へ舞ひ戻つて見ると、幕の内の關取然とはゞを利かせて居るげな。亦た以て洞宗の禪風不振を察す可しだ。

其癖世間の文學は割合に進歩して居るから、若し此洞宗僧にしてせめて十數年も骨を折つて呉れたら、相當の人物も得らるゝであらうが、どうも今の洞宗僧は骨格の培養を後にして、筋肉の肥滿に力を盡す風であるから、素人目から見ると其油ぎつた面貌其ドツシリとした形容は大徳らしく見えるが、其内容を解剖して見たら、肉が肥えすぎて骨が瘦せてをるから、一度少し強い疾病に出會つたら、唯ツた一撃の下に其の胴骨がボキンと折れて仕舞うのだ。故に道の上では其の文弱に失するよりは、寧ろ粗野に失する方が、まだ取得である。どうも曹洞坊主の様に成つては、教相僧と、殆んど擇ぶ處なしてある。そんなことと何處が禪僧であるか。

斯く云ふと、何んだか禪と云ふ者は一種特別で、そして禪は臨済に限る様に聞えるが、禪が果してそんなもので有つて耐るものか。禪に宗派はない、誰れてもやる人に存するのだ。若し夫れ五家七宗の言葉に執して、禪は其内の何家何宗に屬するぞと問ふものあれば、衲は概言して、是を總轄して五家七宗の立脚地となるもの、是れ禪なりと答ふるに躊躇せぬのである。

百二十七、學界の幽靈亡者

どうも世間の博士とか、學士とか、教相學者とかは、兎角小利口だから駄目だよ。禪をやり徹して其學問をも活用さす根氣がないから中落をするのだ。何も學問は悪いのては無い、本來幽靈然たる脚の無い奴等だから、歐米風に酔ふたり。總ての物質的潮流に酔うて、學問に使はれて居るから、つまり學界の亡者と云ふ外はない。亡者や幽靈では、學問を活用して使ひ切る事の出来る道理はない。

専門から云うたら、鳥尾得庵杯もまだ一室に這入つて居らなかつた。夫れは彼れの書いた著述で自白して居る。正面から見たら到底論ずるに足らぬ賸せ物だ。然し其側面から觀て與へた方面から眺めて見れば、矢張天下の豪傑であるから、伊藤や井上にも手に合はなかつたから、彼等が相談して、鳥尾が頑固で致方がないから、歐米の文明を視せたなら我が折れて温順に成つて、少しは與みし易くなるだらうとて、俄かに彼れを歐米視察員として派遣を命じた。然るに鳥尾は到る處の大政治家や、哲學者や宗教家に接近して、其力量を商量して見た所が、まだ禪の室には入らぬが、既に禪の堂内には這入て居る彼の活眼で視た事故、歐米の諸大家杯と云うて居る者は、悉く皮相的の物知りて、蜂の巢の様な穴だらけには、流石の彼も愛憎もこそも盡き果て、仕舞つて歸つて來たから、今度は骨髓からの頑固と成つて仕舞た。此は畢竟彼等俗物が寄つてたかつて西洋迄遣つて試験済に爲たのであつた。て其頑固が愈面白くなつて來たので、彼の荒馬は伊藤、井上の如きでは到底御し切れぬ様に成つた。つまり鳥尾の眼か

らは、伊藤井上は愚、ビスマークでも、グラッドストーンでも、一世を風靡する大哲學者でも、實地に商量して見ると、直に馬鹿の本性が見えるから仕方が無い。此話は彼が歸朝匆匆自ら衲の許へ来て話して居た事であつたのだから間違はないのだ。夫れて日本から西洋へ留學させても、西洋の皮相に酔うて、和魂を喪失させて幽霊と成つて歸つて来る如き、猿智慧の人物を遣る杯は、畢竟有害無益だ。何んでも確かに一見識を有つて居る脚のある者を選んで、海外へ留學さすが良いのである。烏尾如きてすら世界で何んとか斯とか云つて居る大家の内兜を見透かす力の有るは、全く禪の力でないか要するに世の中は、禪の専門たる達觀者から見下ろす時は、眞に馬鹿氣たものである。

百二十八、動中の工夫

公案を拈提するには、長遠心即ち長遠不退轉を辨取して、究め來り究め去つて、心の行く所が無く成り來れば、忽然として睡夢の覺破せるが如く、蓮花の開くが如く

に、自然に一片と成るのであるが、蓮花の開くのは朝寢坊の知らぬことで、花の開く時には、バラツクと音がして、同時に妙なる香氣を放つとは、實に何んとも彼とも得も云へぬものだ。兎角世人は坐禪は閑人の爲すもので、業務多忙の吾れく者流には、到底出來得ぬと濟す者があるが、多忙の者程坐禪の大必要を感じるのだ。閑暇の時にのみ爲た坐禪は、多忙の時に間に合はぬ事があるが、人事の百忙中即ち日用の塵裡に遣つた坐禪は、何時でも役に立つものである。坐禪は坐るには限らぬ。商人は取引中ても、軍人は戦闘中にも屹度出來るのである。志あるものは宜しく世務に七顛八倒する間に於て公案を拈提せば、悟不悟、徹不徹とに關せず。必ず所得がある。坐禪はやつてさへ居れば、即ち無事の人となる。無事の人とは即佛祖だ。三世の諸佛も只是箇の無事の人だ。臨濟和尚は無事貴人と云つたが、此無事は何もせぬ無事では無い。「百事紛紜上に於て無事に通ぜば、見色聞聲も響する事を用ゐず」と古徳も云つた如き、多忙中の無事だ。見ざる聞かざる云はざる庚申や、首尾四足の六藏なる龜の如く、

隱退主義では駄目だ。靜中の修行は動中に用を爲さぬぞ。動中に靜あり忙中に閑あり有事上に無事の人でなければ、何事も遂行せぬに極つて居るのだ。

輕薄の坐禪を爲て居ては、逆境の時に臨んで、必ず尻尾を露はす者計りだ。物識、事識、牛の尻、尻ほど臭いものはないのだ。此市中の物識よりは、八瀬や大原邊りの田舎の方が、餘程好い處がある。總て都市の者より、邊鄙の者の方が何れへ行つて見ても好い如く、佛法の信心も、都の輕薄な者より、田舎の赤毛布連中の方が必ず好い。都には偽佛者が充滿して賢者は居らぬぞ。

百二十九、縱横無盡の透觀

變則て以て禪を修せんとする一類の徒が、華嚴經なんかで遣らんとすることがあるが、禪は強ち何經に依らねばならぬと限りはせぬから、華嚴でも法華でも好いたものて遣るがよい。併し幾等金口の眞説て成る經文でも、只文句を見て本來の面目を突き

止めんとした處が、到底畫餅と一般で、徒勞に過ぎぬ。だから衲等は敢て修行者に對して經文研究を不可なりとは云はざるも、若し經文を看んとすれば、之を縱横無盡に透觀せよ。如何に精力を絞つて字句の間に逍遙したとて、大悟徹底の目的は達し得られぬと云ふのだ。

然るに一類の修行者にして、眞に華嚴によりて禪に入らんとせば、華嚴の全體は首より尾に至るまで四法界なれば、善惡邪正醜美曲直も悉く華嚴たるを知れ。貴賤貧富智愚禍福是亦擧げて華嚴界たるを悟れ。宇宙の萬象天地人の三才、一として華嚴の四法界たらぬはなしだ。故に華嚴を觀るのは順逆ともに他物の想を作さず、死せる法界に迷はず。活きた華嚴の重々法界で、何處までも遣り徹す可しと云ふのだが、さてこんな縱横無盡の大自由自在の研究法が、教相學から出た文句いじり坏て出来るかどうか、再思三考を要する處であるのだ。

公案拈提には一念相續して千了百當などと説くな。這般のことは總べて思うては

駄目だ。思うたら必ず味噌をつけるぞ。念々般若の中に在りて、異念なく間斷なく遣るのだ。他人の脚下や自分の脚下が見える様ではいかぬぞ。正邪は畢竟別問題として懸れ。一念凝つては婦女も石となる古譚があるぞ。不了淺薄の婦女尙且つ然り、況んや我正法の正念に於てをやぢや。

百三十、有所得の心

有所得の心を將て道を學するものは、業を轉ずる能はず。業を轉ずるに難きものは、必ず半途にて退屈す。半途にて退屈するものは、終に道を得ずして悶々の中に倒る。故に道を學し禪を修せんとするものは、常に其退屈を避くるに努めざる可らずだ。佛在世に一羅漢の經を誦するものあり。其聲悲愴、蓋し情の感激に過ぎて窮迫を現ぜり。世尊乃ち是を召して、汝が出家前の家業は何なりやと問ひ玉ひければ、羅漢は輒ち其音樂師なるを答へ申したり。其時世尊重ねて彈琴の要は緩急何れにありやと問

ひ玉へば、彼は急なれば絶し、緩なれば鳴らずと奉答した。其處で世尊は爾り、佛子の修行も之に外ならず。汝が誦經の態度は、恰も彈琴の要を得ざるに似たり。宜しく退いて緩急の要を得て、呂律節に適ふ調子に倣うて修行すべしと、垂示せられた事がある。禪定の修行また此聖譬に違するを得ず。故に禪は一時の感情に湧湧せる藥罐の元氣で遣つた處が、情火の滅退と共に道心もまた退轉する様になるから、とても入證には到らぬ。入證に到らぬと必ず退屈する。退屈すれば、例の天台や華嚴やと狼狽へて歩く。今では佛法の外に耶蘇教などと云ふ新宗教も來たから、そんなものなどへ寄留して見る。そりや耶蘇教も結構ぢやけれども、立脚點のひよこくして幽靈的の奴が、耶蘇教へ移轉した所が、到底移轉地の主人公となるとは出來ぬから、假令宗旨を換へて見ても、相も變らず不得要領の幽靈たるに過ぎぬ。其口實を聽けば、或は異教に入りて佛耶兩教乃至百教諸道を比較せんとすと。其聲や甚だ美なりと雖も、未だ自家に物を比較すべき立脚の物差がなくして、妄りに比較研究を叫ぶ、幽靈然たる不得要

領の變化物にあらずして何んぞ。然るに近來我禪門中にも往々にして、修行中に腰を抜した弱味憎の連中が、敢て自家の弱點を糊塗し、若しくは一種の劣情を満足せんとして、斯る放言を弄じて兜を十字架下に脱するもの少からずと聞く。こんな薄志弱行の腰拔を歓迎する耶蘇教の將來も、また氣の毒なるかなだ。

百三十一、人は釘付けに非ず

人間は釘付ではない。其釘付でないものを無理に釘付に成らうとするから、嚙り付きて候の、打き落して候のと種々の混雜が起りて、やれ候補運動だの、やれ選舉騒ぢやと遣つた跡は、釘痕だらけの疵ものと成つて仕舞つて、優しい所て新聞の種か、も一つ進めば法律の厄介ものさ。

だから人の出世なんかを見て、夫れが癩に觸る様な見地では、逆も進退懸引に、自由自在の活動は出来かねる。若し自家に定りたる禪力ありて、公案提撕に間斷なき時

は、魔境に入りて魔事を行じ、外道に參じて邪道を學ぶも、自己は常に其圏外に超絶して居ることが出来る。故に人若し善く此境界に達せば、所有の諸事諸境悉く來りて我を饒益する資料となり、我をして菩提道を成就さすのである。故に此菩提道を成ずるには、教相をやるも可、儒教を遣るも可、神道乃至耶蘇教をやるも可、俾挽もよし、乞食するもよし、紙屑拾もよし、犬の皮剝もよし、何んでもよし、つまり君子適くとして可ならざるはなしだ。

若し夫れ未得道の輩にして、斯く觀し去り觀し來らば、其狀恰も梶を絶えたる捨小舟、取付く島もなき境界に立つか、或は蠟を嚙んで膏味を求めんとする如き無味の想を爲し、其果は心頭悶々として五里霧中に入るの感起る可し。是の際の一段は行者が一層の努力を要するの時、此悶々の暗黒を透過せば、即ち成佛の光明界退いて千仞の暗黒に墮するも、進んで光明界の絶頂に達するも、其關所は薄紙一枚の境界即ち悶々の間に在り。而かも此一枚や堅牢無比、故意を以て破れず、鐵鎚を揮つて碎けず、

唯如上の定力を以て之に當れば、時節自ら來りて、諸々の舌頭を坐斷して、一大發展を見るに至る。而して世智辯才の徒は多く其悶々にだも到らずして腰を抜かし、自害害他以て道を運轉すとす、實に恐る可きは盲人の盲斷にこそぢや。

百三十二、吹笛術の奥義

現今日本一の尺八の宗匠たる、下京松原通六波羅の樋口孝道が曰ふには、此吹笛術でも、此男は可なり妙手に達する事が出来る大機ぞと見た以上は、本手の一手のみを吹かせて置いて、まだくいけぬ、そんな事では駄目だくとの一點張てやらせるのが、此上なき師たる者の大慈悲である云々と。夫れから同人が之を實驗した話を聞いて見ると、樋口が前年九州を漫遊した際、熊本で一曲吹いた處が、肥前の佐賀から洞蕭俱樂部の宗匠が遣つて來て、其一曲を聴いて感歎のあまり、早速佐賀へ招待して往つたさうだ。大體此佐賀藩では、藩士が虚無僧を誰何した爲、閉門と成つたりする程の所で

あつたから、就中尺八には今でも凝つて居て、其有志者の集合所を俱樂部として居るが、其尺八の先生は、九州第一の吹手清水静山(佐賀人)を師範として居たのであつた。處が樋口を招待して來て部員一同が練習を頼んだ所が、樋口は師範者たる清水にのみ傳習してやらう、他の者では薩張譯が分らぬから逆、清水だけに教へたが、中々飽足らぬ所から、其清水が俱樂部を代表して、京都の樋口の許へ練習に來た。其節樋口が納の許へも連れて來た事もあつたが、樋口の傳習の方法が面白い。彼は決して端物は吹かせず、本手の瀧落し一曲のみを一年半吹かせて、毎日々々八釜敷いけぬく遣り通したから、清水はかう六ヶ敷つては逆も尺八吹きにはなれぬと遂に斷念して、平生吹き慣した尺八を打ち割つて仕舞つてから、何か轉業したいと申出たから、樋口は漆器細工の妙手の許へ世話して置いた。所か漆塗りも最初は面白かつたが、段々六ヶ敷なつて來たから、復た尺八が吹き度なつて、樋口に内密で再び吹き懸けたが、終に耐らず樋口の許へ復歸して、例の一曲を吹いて居たが、まだ師匠から允許を受けぬ中

に佐賀へ歸つて、或る大會の席上で、清水が其苦みつゝある一曲を吹いたら、一同が非常に驚いて喝采したさうだが、今となつて本人も今二三年も樋口先生の許で一曲を吹いて居たら好かつたのにとの事を、樋口の許へ書簡で云うて来たさうだ。禪も之と同様で、一公案を拈提して退屈せず大悟する迄やり通したら、其後は自由自在となるのだ。

百三十三、予が戒律主義

衲は持戒主義だが、今の世の中で、こんな少さなとを云うて居ては間に合はぬさうな。なんでも大袈裟に興學布教を遣らねばいかぬげな。……實に驚いてしまつてはないか。佛世尊は死にがけに何んと言つた。汝等比丘於我滅後……學問せよ、布教せよ、波羅提木叉の持戒杯は、畢竟して小問題なりと云ふたのか。鳥將死其聲悲、人將死其言善と云ふ人情が、世尊の上に應用さるゝとすれば、娑羅双樹の間で遺

言した數ヶ條は、末世佛弟子の定規に相違ない。だから一人の尊者は、此親切懇懃なる遺言に對して、何んと言つたか。日が冷くなつても、月が熱くなつても、佛の今の遺言は變化する氣遣はないと。だから我々佛弟子たるものは、只、今の遺教によりて、此聖旨を轉々して未來永遠に傳へるで御座らうと答へたてはないか。然れば月が熱し日が冷える場合がありても、波羅提木叉を主としたる佛の聖旨は、異動あるべき筈のものでない。此聖旨の遵奉は形式に於ても精神に於ても同様である。持戒の鉤なきものは狂象を放し飼ひにする様なものだと言せられたが、成程今の持戒主義を小問題杯と云ふ、才僧とか云ふ者の遺言を見ると、實に放縱である、實に無慚である。鉤を以て禁制するものなきが爲に、爲たいとを遣つて、果は世の罪囚と伍して、汚はしき訟廷に召喚され、終には身を鐵窓の裡に投じて、馳聲を社會に流す様になる。斯る例は最早説明するまでもなく、事實の證明する處である。而かも斯る儕輩が斯る境遇に立つは、堂々たる主義目的の下に殉難するのでなくて、實は狼心獸慾が動機となりて、佛罰を蒙

つた奴に限られて居る。今日の不持戒論と云ふものは、實に如此、魔僧の爲に唱道されてをる。だから我田引水の御都合論に相違ない。そんな御都合主義の迷妄に附和雷同する儕輩も、畢竟じて同穴の狐である。一朝喰ひ損ねたら人のものでも打ち落して食ひたい、赤兒の腕を拗ち上げても取ると云ふ、鬼夜叉同様の奴ぢや。そんな奴に唱道否實行されて居る、肉食妻帯夫れが何んて有り難いのだ。若し今日で云へば、釋の雲照が無戒論でも主張する様になつたら、そりや衲でもどんな理窟かな位で鳥渡耳は借してもやるが、まあ世務僧や白面小僧等の言ふ無戒論には、傾聽を拂ふ必要はないな。

百三十四、靈的健闘

禪學と云へば何か風流人でも遣る事の様に見える。物好き半分に翹つて見て、意外の反響に喫驚する奴がある。どうして宇宙の眞理を自己の所有として、釋迦に下足を

直させて、孔子に灰吹き掃除をさせやうと云ふ一大修行が、風流や韻事やを弄ぶ様な輕舉で成効してたまるか。惣して道を求めるには、不惜身命でなくてはならぬは無論であるが、就中此禪學は、不惜身命を實地の上に不言實行せねばならぬ。彈丸雨飛の中を潜つて金鷄動章を貰うた中にも、引くには引けず、逃げるには逃げられず、仕様事なしに進んだり踏み止つたりして、抜かぬ太刀の功名で、此僥倖をした兵士もあれば、上官將校も有つたとの事を聞くが、夫は多分露兵の話で、我忠勇武烈の軍客に、そんな疎末な弱蟲は無からうとは思ふが、大勢を便りに突撃したり、號令や軍歌に逆上して敵壘に飛込んだりする様な、所謂狂的の勇氣位では、到底禪的の金鷄動章は頂戴は出来ぬぞ。衲は斷言する。我禪門の卒業者は、彈丸の雨飛にも、水雷の爆發にも、鐵條網の截斷にも、惣ての戰鬪行爲に、優るとも劣らぬ、靈的健闘を経過したる勇將銳兵たるを。此確信と此腕がなくては、人の前に出て「禪」と云ふ「禪」の話は出来ぬぞ。まあ其處までの覺悟、即ち命懸の決心で以て遣らねばならぬは禪學ぢや。夫れを世

間の奴が、風流や韻事の様に見つて遣り懸けて見るのは、宛から軍隊生活を風流や韻事の様に見つて入營すると同一である。そんな奴が何して眞個の戦闘員となることが出来るか。縦令史家は寛容して壯烈なる戦死ぢやとか、武勳赫々たる良兵士ぢやと謠うた處が、其人其者の實價は、腰拔野郎の鼻垂小僧ぢや。處が彼の有形的の戦場では、そんな腰拔でも随分僥倖の手柄や、脱かぬ太刀の功名をすることもあるが、我禪門ではそんな僥倖や、そんな功名は少しも出来ぬぞ。處がそんな弱蟲が随分我佛教にも澤山ある。彼等の癖に、末法濁世を口實として、骨折つて修行しようとはせず、唯々自恣放縱で以て、此世を暮し、死んで彼の世で百味の飲食を只でせしめようとする、横着を畫いて居るが、そんなこととて彌陀や諸佛の慈悲に濟はれる決定信が得られるか。信念の決定せぬ奴が、どうして佛陀救済の手に乗ることが出来るか。思つて見れば、皆んな露助じみ、皆んなチャンくじみ、否兵隊にしたら露助にもチャンにもなれぬ腰拔ぢや。そんな腰拔の癖として、自己の薄志弱行を掩ふが爲に時代の末法を唱へ、機根の劣等を唱へるのだ。一方から見れば、お釋迦も要らぬ毒語を残して置いたものだ。つまり彼等は癩病も友を欲しがらぬ道理で、自分が眞面目に修行する勇氣がないから、お經の中にそんな方便語があるを幸ひに、夫れを金城湯池と頼んで、自家の弱點を辯護するのだ。随分情なき次第である。

百三十五、覺夢不二

悟と不悟とは夢と醒覺と同一なるものである。釋迦文佛は楞嚴經に於て「汝緣心を以て法を聽かば、此法も亦緣なり」と説いてあるは、此般の消息を喝破して居る。又た聖人に夢無しと言ふは、決して有無の無ではないのだ。夢と非夢とが同一なるを云ふたのだ。それだから釋迦も金鼓を夢た事が、金光明勝王經に載せてある。孔子が兩楹に奠らるゝを夢みた事が禮記にある。聖人に夢なしと雖も、二聖已に夢物語をして居る。蓋し夢は全然妄想の働きなれども、衆生は顛倒して日用目前の境界を以て

實と爲して、此日用の作事の全體が、悉く是れ夢なる事を知らぬから、其中に於て復た種々虚妄の分別を生じてをる。斯る輩は想心と繋念と神識の、紛飛するのを以て實夢と爲してをるが、これは夢中に夢を説く顛倒中の顛倒なる事を知らぬのだ。故に釋迦は老婆心の親切を以て、悉く能く偏く一切法界の所有る微塵界に入り、一々の塵中に於て一切皆夢を示して、自在の法門を以て世界海微塵數の衆生の邪定に住する者を開悟せしめて、目前實有底の境界を以て安立海と爲して、夢と非夢と悉く皆な幻なる事を悟らしむれば、夢なるか、實なるか、夢を全して是れ實、實を全して是夢にして取るべからず、捨つべからずと云ふことを發見されるのだ。迷うて居るのも夢、悟つたと云ふのも夢、何にもかも悉く夢だよ。處が其形容真相を示さんとて、夢幻だと云へば又夢幻に迷ひ、夢幻計りては無いと云へば、實有であるかと妄想する、困つたものであるのだ。だから不可取不可捨と云ふ處が、聖人に夢なしと云ふ次第だ。要するに、寐てから見る計りが夢てはない。現醒中に始終夢を見て居るのだ。一切

の妄想は、悉く夢である。此世界は畢竟して妄想の建立だよ。夢計りてないと云へば、實有と迷して常見に陥り、夢だく夢計りだと云へば、又頑空單無に落つるのだ。其處で、寐寤合一、覺夢不二の要處に到達せざればならぬのだ。

百三十六、車挽きの稽古

衲も青少時代から、荐りに車挽きの稽古をして居る。今の大眾も矢張遣つて居る。處がな、此車は中々挽けぬぞ。板や釘を集めて造つた車なら何時でも挽けるだろが、衲等が練習中の車はどうも挽きにくい。衲も今生の中にたつた一度だけでも。此車を挽つて見たいと考へてをる。蓋し古今を通じて此車を挽きし者、抑も何人かあるだ。嗚呼車挽も亦た難い哉だ。

なに其車歟——そりや容易に見えぬ。此車は挽き難いばかりでなく、見付けることすら困難だ。昔造車家の奚仲が、兩輪なく軸なく幅なく、而かも能く眞の車の用をな

さしむるもの此車の面目なり、と云ふ様に、積書を出してある車だ。我僧堂では、大衆雲衲が托鉢したり、採薪汲水をしたり、灰頭土面で、一切衆生を哀愍の爲に、此車の發見や運轉に身心を委ね、世慾を棄て、一生懸命に遣つて居る。師匠も弟子も全く車輪となつて不惜身命だ。處が衲等能所がこんな工合で日夜車挽の稽古や、車の製作に骨を折つて居ることを知らずして、唯々世間向きの學校仕込みの俗學俗才を以て、愚俗社會で誤魔化しの利く處から、何んのかんのと蟻螂の斧を振り舞はして居る様な奴は、先づ以て價の高い米の飯を喰はして置くは惜しいものだ。

百三十七、速成的禪學

大體先聖が教を設くるのは、名を求めず功にも伐らず、春期になれば自から樹木に五色の花が咲くが如く、時節因縁が到來すれば、各々相知らざれども、其本性に随つて、大小方圓長短臭香も同時に發作するのは、是れ皆各々本有の性が、縁に遇うて發する

のみだ。然るに近來は、名を求め功利に伐る爲に速成禪學を遣つて、悟顔をして誤魔化し渡世する者の出來たには、實に閉口である。又偶々坐禪する者があると思へば、急いで速成を期するから、恰も溫萌の野菜と同様なもので、無理に發作させるのだから駄目だ。百丈禪師は「佛性の義を識んと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。時節若し至りぬれば、其理自ら彰る」と云はれ、又南嶽讓禪師は「汝が心地の法門を學ぶ事は、種子を下だすが如し」と云はれてある。然るに充分骨を折つて坐禪を遣つた者でも、堂に昇りて尙ほ容易に其室に入るを得ずだ。然れども既に悟り了れば以て實と爲すも亦我に在り。以て非實と爲すも亦我に在りて、水上の胡蘆の如くて、人の撞着するなければ、常に蕩々地て、纔に觸著すれば便ち動き、捺著すれば便ち轉轉々地だ。是れ強ひて爲すにあらず、亦法も是の如くなるが故だ。古句に

月一つもたぬ草葉の露もなし

だが、今云うた時節因縁だとして、寢て居て待つのでは無い。桃栗三年柿八年でも、矢

張充分に世話してやらなければ、好き結果は無いと一般、悟る時節でも拵へるのだ。拵へるとは、坐禪に骨折るのだ。

百三十八、佛教中の王道

禪は實に佛教中の王道である。故に佛教を學んで此道を得ざれば、其人は終に活動的の人とはなり得ざるのみならず、其道も亦た活きて働くことは出来ぬのである。だから禪を見るに素人の、所謂盲目の垣視きて「禪は膽力養成の法也」抔と誤解されては耐つたものでない。

日本も愈々世界の日本となつた。此からの國民は何んでも大禪定力がなくては、平時戦時共に何事も成効は覺束ないのである。だから前々も云ふ通り、智慧才覺の腐れ聰明などを振り廻はす様のことでは、世界的の新進の國民としての本能を發揮するとは出来ぬ。去れば文學科學諸有の學問も必要なれども、夫れは人物の要素が出来て

から以上のこととて、人物養成の爲には、是非此禪定を以てせねば、到底世界の舞臺に立つて、世の中のすれつからし者流の心術を觀破する力量は養成されぬ。此力量が無くちや、毎時でも外人の玩弄になるぞ。ポーツマウスの談判はどうしたものだ。

百三十九、迷悟と境遇

釋尊は楞嚴經に「衆生顛倒して己に迷うて物を逐へり、物は本自性あること無し。己に迷へる者のみ自ら之を逐ふのみ、境界本差別あること無し。己に迷へる者のみ自ら差別せるのみ」と曰はれてある。既に差別の境界の中に在らば、則ち佛法にあらず。天竺に廣額屠兒と云ふ屠牛(トンコツ)を職とする者があつて、屠刀を放下して立地に、我は是れ千佛の一數なりと云つて、便ち成佛した者がある如く、迷悟は職業の醜美、行爲の善不善に關らず、只其覺不覺にあるのだから、公案を拵提して破除の想を作すことを用ゐざれ。差別の境界に打入せずして、後を念ひ前を思ふ事を得ず、一刀兩斷す

べきものだ。臨濟和尚が虚明歴々と云つた處だ。此場合は、殺盜姪妄も何も斯も本來毘盧沙那佛だ。本來真靜で、動用語笑隨處に明了にして、更に欠少する事無したが、今時の人は箇の中の道理を悟らず、妄に自ら事に涉り塵に涉つて處々に染著し、頭々に繫絆して居るぞ。本來、真靜とか、虚明歴々といふ處から見ると、諸有數萬卷の經書類も、草双紙の價値もない。車輓くも下婢が味噌するごろくも、官吏の髯面も皆な同じ事だぞ。又商人が算盤珠の撥々も、悉く佛ならざるは無した。大體煩惱を除かんとするのが悪い。達人は之を其儘に使ふのだ。君子は其獨を慎む扱は駄目だぞ。心を凝らし念を斂めて空に歸せんとする類は、是れ空亡に落つる底の外道で、魂不散底の死人となる者である。公案拈提の時は、何んの伎倆を作す事を用ひずして、但だ行住坐臥の處に於ても間斷なく、喜怒哀樂の處に於ても分別を生ずる事莫く遣るのである。此遣方は伯夷的でなく、柳下惠の如く、四圍の境遇がどんなであつても、毫も貪着なく遣るのだ。つまり無雜作にやるのだ。水心ありて能く泳ぐ者は、水中にあつて極く無

我無雜作で、自由自在である。然るに初心の者が游泳をやり掛けて手足をばた／＼させて骨折つても、意の如くならぬ。又針仕事でも、雑巾差時代には、如何に意を用ても駄目だが、熟達した曉になると、無雜作にずん／＼出来る。又書も同様だ。禪も如何に世間の大學者や大智者と賞讃されても、やつて見た處で、實際徹底しない者は、小娘の雑巾差と同じく到底駄目だ。

百四十、我此土安穩

禪家に「世界恁麼に熱す、未審什麼の處に向てか回避せん」と云ふ公案があるが、昔此公案に答へた老僧は「鍔湯爐炭裏に向つて回避せよ」と云うた。是は中々面白い。此處には衆苦も到る事は出来ぬぞ。此鍔湯爐炭裏に入るには、一念相應と云ふ妙薬を用ひなければならぬが、この鍔湯爐炭裏の消息は禪計りでない。法華經の自我偈にも「衆生見三劫盡一大火所燒時我此土安穩」とあるてはないか。又信長が甲斐の慧林

寺を焼いた時、快川老師は樓門に百有餘の大衆と俱に安座して、各自末期の一句を唱へたが、最期に同老師は「安禪何必須ニ山水一滅却心頭一火自涼」とやられたてはないか。其節一雲衲が獨り殘留して、此光景を本山妙心寺へ報告する爲、信長勢が拔身の槍や長刀等を提げて居る重圍の真只中を目懸けて、樓門より飛び降りて、其處此處を掻い潜り、辛じて遂に落ち延び、本山へ委曲報告したので、其状態が分つて居るのだ。これは慧林寺の事だが、此建仁寺の大衆も、豊臣と徳川から二回焼かれんとした時、火定三味に入らんとした事があつた。

百四十一、名僧尙ほ在り

如何に明治の佛法が衰へたとて、今の僧侶が如何に墮落したとて、其中に正法根機のもの一人もないとは言へぬ。又佛法の光輝が全く消滅したとは言へぬ。佛光もある處には随分輝いてをる。真正の僧寶も場所によりて嚴存して居る。たゞ闇黒の社會

が廣くして光明界が狭いから、佛教全體が闇黒の様に見える。腐僧が多くて清僧が少いから、無僧の如く感ぜらるゝ。然れども腐僧を腐僧としてある代り、清僧もまた清僧として存在してをるのだ。腐敗の僧侶が佛教の表面に現れて居たとて、其腐敗堆裡の陰には、随分智徳兼備の名僧もあるのだ。

假令西比利亞の砂金鑛へ行つたとて、崑崙山の麓へ往つたとて、金と砂とを比較したら無論土砂が多くて金砂が少いに相違ない。少いものは表面に現はれにくくして、多いものは捜さなくつても顯れてをる。けれども少いとて砂中に金がないとは云へぬ。今も夫と一般で、腐僧が佛教の田面に一ぱいに成つて居ても、既に佛教と云ふ福田のある以上には、其腐敗僧の中に名僧知識が混じて居ないとも言へぬことは、恰も砂金鑛と相場が極れば、砂の中に金が潜んで居ると一般で、上手な鑛夫は其多くを發見し、下手な即ち鈍眼の鑛夫は、朝から晩まで探しても、容易に一勺の砂金をも發見せぬ様なものと同様だ。我教田でも、腐僧を見るはどんな鈍眼者流でも出来るが、其土砂同様

の腐僧の中から、智徳の名僧を發見すると云ふ事は、矢張眼が高くなくちや出来ぬ。殊に我禪門で修行者の力量を見るには、其修行者が他の人の實力を商量する眼識の程度によりて、其者の位が知れる。世間でも蛇の道は蛇が知ると云ふ様なもので、英雄を知るものは英雄、名僧を識るものは必ず名僧に近きものでなくてはならぬ。故に世に隠れたる師家を發見するの力量は、中々並や大抵では出来ぬ。列子衛に在る六十年、人其賢なるを知らずと云ふは、列子が愚人であつたと云ふ譯てはなくて、衛の甲乙が賢者の列子を見るの眼識が無つたと云ふ事である。だから今も一處不動で、列子同然に蹲踞して居て、併も世間からは、相變らずの腐僧よ愚僧よと擯斥されてをる、一代の名師がないとは言へぬのである。

百四十二、便所的佛教

今日の法難は、外の壓迫よりか内の腐敗に在る。つまり今の佛教は病的である。其

症状は、結核的である。貧血的である。戒定慧の三學は、佛法活動の血である。肉である。骨である。其三學の要素が結核的の病毒の爲に次第に腐敗しつゝある。だから肉體の攝生を重んずる人が、病毒の在る所へ接近せぬ如く、精神の衛生を貴ぶ人は、此類風ある僧侶の側に寄り付かぬ様になつた。是れは決して無理ではない。事實上今の腐敗坊主には接近出来ぬ。接近は快感が紹介する。厭離は不快感が動機となる。だから今の坊主に接近するが否とかなんとか云ふと、其云ふ人を偏狹の様に窮窟の様に非難する人もあるが、是は畢竟局外者の言ふ事で、實地こんなものと接近せねばならぬ役目に立つ身は随分つらい。いや宗派會議、いや各宗何々會議、何の事はない、肥桶の持ち寄りだ。臭氣芬々鼻も捻ぢ上る感がする。だから對坐對話の時間内は、宛然便處の中で、彼の糞虫を相手に鼻をつまんで辛抱すると同一ぢや。併し乍ら、糞虫は汚物を以て天地として居て、却つて臭の臭を知らぬが如く、例の腐敗僧輩は、今は殆んど是と趣きを同じくする有様であるから、自分が臭氣を發射して潔淨の人に迷惑をさすこと

を思はずして、其臭氣を嫌らう潔淨家を憎むのである。

百四十三、禁肉禁妻論

夫れは問答までもない、噉肉妻帯を宗制で許して耐るものか。然り今は公然の黙許ぢや。禁肉禁妻も有名無實ぢや。有名無實ぢやと言つて明文にして解禁することは出来ぬ。見よ、今では眞宗風が歓迎されて居るが、又た時期が廻り回れば、肉妻生活に鑿きて、禁肉禁妻が唱道される時節がある。畢竟我教の僧侶が解禁を唱へるは、向上の結果でなくて墮落の現象であるぞ。墮落の現象として出来たものを、師家や管長が公許する様に成つたら、夫れこそ、佛光は暗黒ぞ、正法は亡滅ぞ。

解禁者流の眼には映ぜぬか知らぬが、佛家から見ただ在家連中ても、極めて學術に忠實な人は、無妻主義で以て學理の研究に全力を擧げて居るではないか。獨逸あたりでは菜食主義の人が團體を組んで、肉食問題の上に一種の罪惡觀を鼓吹する様に成つたと

聞くてはないか。

學問の研究や、少數子弟の教育に熱心なるだけの在家の學者でも、家庭が邪魔になると云ふ實例があるのに、數千年の前から家庭の煩累を避ける様に出来て居る佛家が、在家の學者以下の行動を取る様でどうなるか。僧侶の行體は慈悲を崇ふ。而かも獨逸あたりの菜食論者が、肉食者の性質が不淨食の爲に人的性能を毛獸的に惡化するとして悲難の聲を放ちつゝある傍ら、自家數千年の美風たる清淨食を捨て、活きた動物を殺した不淨食を食るとは何んのことだ。思へば情ない劣情を資本に、つまらぬ屁理窟を並べるぢやないか。どうしても僧侶は無妻が結構ぢや、不肉食の淨膳が本分だ。

だから今の俗僧等が自分に都合の宜い問題を出して、若し我宗制上に肉妻の解禁を迫つても、衲が管長として管理して居る宗派は斷じて許さぬ。萬一衲が此頑強の爲衲の位地や身上に危害が及ぶ事があつても、衲は決して一步も退かぬ。八家九宗が悉く有妻噉肉を公許しても、衲の宗派だけは確に動かぬ。衲は一人でも頑張つて一陽來復

の時節を待つのだ。なかに彌勒の出世を待つと云ふ、氣長い古徳も有るてはないか。

百四十四、超出越格の倫理

禪宗は果して非倫理的なるか、沒道德的なるか、倫理を否定し道德を沒却する宗旨は是れ邪教なり。然らば禪宗にして若し非倫理の傾向ありとすれば、其宗體は全く邪教と謂ふも可なり。若し我禪宗が邪教ならんか、何んぞ世道人心を殘賊する邪教にして、其壽命を保つことの長に失するの甚しきや。

抑も我日本帝國の國性たるや、世界萬國の上に卓絶する一種の氣力を保持す。故に此國に來るものは苟しくも此國性と合せざる限りは、決して壽命を此國に保つを得ず。故に外來の教徒にして、此國に於て其接觸を永く久しく此國民の上に保つものは、此帝國の國性と吻合するものあるに由る。而して此國性は、世道人心を殘賊する如き惡分子あるものは斷じて許容同化を容ざるの傾きあり。抑も宗教は多く多數の國民を地

盤とすと雖も、我國の歴史上宗教の選擇は、國民に先んじて聖帝賢相によりて行はれたれば、若し禪宗にして世道人心を賊する傾向ありとすれば、何んぞ敢て末代の論評を待たんや。蓋し其排斥は曩日の聖帝賢相によつて斷行されたる筈なり。

然れども唯だ是のみにては、論客は必ず満足を表するに躊躇するものあらん。故に尙は之に誨ゆるに「禪宗は超出倫理越格道德を以て禪宗の倫理道德とす」と云はんとなす。斯く云へば論者は必ず之を禪法螺の遁語として、更に何等かの批評を試みるべしと雖も、超出越格の沙汰は、言語形容を以て悉す可きにあらねば、之を言詮に顯はす時は、終に多大の時間と紙面に俟たざるを得ざれば、今は唯だ斯く計り揭示し置くのみ。蓋し世間に云ふ所の倫理や道德や、是を喩ふるに恰も眞珠に對する魚目の如し。凡人魚目を得て眞珠とし珍重苟くもせず、一箇明人ありて眞正の眞珠を持ち來りて之を示すに會ひ、反つて之を疑うて偽物とし、之を以て珍寶界の眞價を殘賊すとして、辯に任せて惡口するものありとすれば、如何なるものも必ず魚目信者の愚を憫笑するならん。

今も亦た夫れの如く、世界の所謂意識的の倫理道德は、之を超越的の倫理道德に比するに、價値なきこと恰も眞珠の前に於ける魚目の如し。未だ眞珠を見ざる人は却つて魚目を以て寶とす。魚目を以て寶とする人には、未だ容易に眞珠の眞價値を會得了解せしむるを得ず。

更に人、禪宗を非倫理沒道德の傾向なりと云ふに就て、反證を一二禪僧の非倫理沒道德にとり來りて其説を辯護するとせんか、是亦偏頗の陋見のみ。何となれば、彼基督教中にも、錚々の名士にして随分破倫沒道德の非行を敢てせる人物ありと云ふに非ずや。多數の間少數の没行者あればとて、夫を捕捉して直ちに其全體を傷けんとす、是れ先づ自己良心を欺かざれば、得て爲し能ざる劣情汚行なりと謂ふ可きなり。

百四十五、形式と精神

禪者が排斥するのは、形式に拘泥する倫理道德と云ふ形容に在る。世には慈善を粧

うて其實至つて不慈善の心術を存するものあれば、信仰を飾りて其心却つて極めて無信仰的人物もある。道を修するもの、豈に其形式の美に眩暈して、其内容實質までを丸呑にするを得んやだ。然るに基督教徒とか云ふ者流は、いや自分は教會へ往くから禁烟禁酒だ。自分は基督教信者だから一夫一婦ぢやと云うて居るものがあるが、彼等は教會とか宗教とか云ふ外面によりて、唯單に自己の慾を抑へて居る。だから其外面は如法如律でも、其内容に至りては、飲食の慾を制する爲、餓鬼の陰火が燃えて居る。情慾を抑へ付ける爲、畜生の陰氣が溢れて居る。それでも社會面から見たら悪いことはないが、眞誠の修行地から觀察すれば、其卑陋の心術實に嘔吐も音ならぬ。基督教ではそんな情慾に惹かされて、種々の罪惡を造らす動機を、惡魔の誘拐と云ふ様だが、佛敎眼から見たら、外面にそんな殊勝な面をして居ても、併かも内容の無形界でいろんな苦痛を感じて居る、内穢外淨の連中をも惡魔と云ふのである。

百四十六、文字教の弊害

いやは何れの宗教でも、文字教は祖師を距ること遠くなる程、其精神に遠くなるには困る。其處に至ると我禪宗だな、釋迦が居なくても達磨が居なくても、少しも差支はない。我即釋迦、我即達磨となりて、五時の說法も今茲て實現することが出来る。死んだ奴を相手にすると得てしているんな間違が出来る。だから大鑑禪師の言葉に「事上より得るものは氣力壯ん也、文字上より得るものは氣力弱し。若し只佗の故紙を鑽て以て本參に當てば、唯自己に辜負するのみならず、實に是四恩に辜負して虛生浪死せん云々」と。蓋し彼の徒輩にありて、故紙を鑽るもの、或は其上乗ならん。故紙も鑽り得ずして盲從妄信を拂ふもの十中の八九なるべし。如此は基督教にも、我佛教中にも能く見る處なり。彼の儒教にも能くある例なり。故に古諺には「論語讀みの論語知らず」の痛誠あるものを。今や轉じて聖書讀みの聖書知らず、佛書讀みの佛書知らずと云ふ可きなりだ。

ずと云ふ可きなりだ。

百四十七、入道の門戸

倫理道德が敢て不要とは言はぬ。是れは佛法に入る門戸であるから、信佛の徒は固より倫理道德を粗忽には出来ぬ。また入證悟道の曉ても、倫理道德が不要になつたとは云はぬ。つまり上乘の道を得たならば、そんな小問題位は勉めずして自ら具はるのである。だから倫理道德の教は、我佛法中の小乗部に於て、委曲洩さず説示されてある。畢竟人天部の教である。大乘から見た小學校である。だから大乘即ち大學卒業後のものには、此小學の課目はさう八ヶ間敷云ふ必要はない。八ヶ間敷云はずとも既に通過して來た道である。夫れを問題とする中には、まだ小乗門の小學校的生活時代であるからである。否な人天教幼稚園的である。

百四十八、乞食の親方

どうだ其處に掛けてあるのは白隠和尚の自書自賛で、書は二十年間五條橋で頭陀行をやつた大燈國師が袋を左手に提げ、右手を出して瓜の施行を受けんとして居る乞食の姿であるが、其賛は

古人刻苦 光明必盛大也 若人不信言 取此老漢

瓜を手なうしてもらふたならば、成程足なうして來つたべい

とあるよ。此二十年の頭陀行を追観すれば、衲等も疊の上に居る乞食であるから、常に此乞食をやつて居ると云ふことを毫も忘れぬ様に爲なければならぬのだ。僧堂の大宗は、今でも分衛即ち頭陀に出掛けるから、衲は實に其の乞食の親方であるのだ。

夫故道あれば食ありと言ひながら居士大姉等の多くの信者が、種々な食物を持つて來て呉れるのは、猿が木の果實を運んで來る様なものである。そんな事を嬉しがつて

は大變だ。大體衲等の許へ食物杯を持つて來て布施するものは、先づ猿猴的の見證と見てやるのだ。衲等は之に對待して居てはつたらぬ、全く之に超越して一段を降つて相對せなければならぬので、佛界は得難く魔界は得易くて、魔界程類はしいものはないから、何ても灰頭土面で、大燈國師が、五條橋で頭陀を行ぜられた様な境界で居なければならぬ。

昔の五條橋は、今の松原橋邊であつたから、此建仁の境内續きてあるから、衲は平生僧堂に居るのを、五條橋上に頭陀を行じて居る觀念でやつて居るのだ。

百四十九、禪者の品々

白隠禪師は非常な才子であつた。然れども何事を爲しても慈悲三昧に住して、眞個の禪に骨折つて之を回復したのであるが、今の禪も其系統を繼續して來て居るけれども、目下の管長とか何んとか云ふ連中には、却て眞個の禪者が稀であるのだ。其中に

は随分人望家即ち徳者と謂ふべき品行の良さもあるが、どうも禪機が鈍い。又古則公案もほんの模型的に遣つて居るから、機鋒の鋭利な處がないものもある。又それ相當に古則を緻密に調べて居るかと思ふと、機鋒が鈍く慾が深いつかて、其古則公案も矢張模型的に流れて居るのがあると云ふ有様である。夫れかと云うて専門の方が充分に出来る者であつても、品行と來たら話にならぬものがある。例へば越溪老師の高足の故鐵牛和尚の如きは、機鋒の鋭き人であつたが、政府の肉食妻帯勝手たるべしと云ふ布達と共に自ら率先して妻帯し、毎年年子で子女を産ましめ、剩へ強飲家であつたので、之が爲に越溪老師を泣しめた事は幾何であつたか知れぬ。老師は鐵牛に與へたる印可狀を鐵牛の二法弟に命じて取り戻さんと爲た際、其使者は鐵牛に呵責されて空しく歸つた事もあつた。濟家の一般の管長及禪僧等からは、非常の不人望であつたが、鳥尾得庵の如きは、晩年に至てからは禪の専門は鐵牛でなければならぬ程に賞美して居たよ。又今では不歸依で以て松島瑞巖寺を放逐せられて、攝州西宮の小寺に潜居して

居る、南天棒鄧洲は、確に専門が出来る。彼れが例の南天の棒を杖いて各地に在る師家を調べ直してやるとして巡廻した際、鐵牛に逢うてあべこべに強く遣られた事があつた。南天棒は西宮邊の小寺に置くべき小機でない、確かに大本山の管長以上の力量がある。専門から云ふと實に惜いものだ。又其南天棒の許に食客をして居る管嶺和尚と云ふのは、南天棒も彼れの力量には叶はぬとして畏敬して居るが、衲も若い時分に彼れの補助を受けたのが非常に爲になつて居る。

此和尚が舊平戸藩主の菩提所の住職であつたが、品行は良くなく、負債を拵へた爲、不歸依で放逐せられた程のものだが、さて禪の専門を擧揚する際には、彼れには叶はぬとして、此間も棒が來て噂を爲て居たよ。又元南禪寺の管長であつた大徹和尚は、曾て東京湯島麟祥院の一隅を座敷借りして、或老婆と同棲して居るから、好くないと惡口して居た者もあつたが、専門の方は眞に確かなものである。總て管長とか、何んとか樞要の位置を占むるものよりは、浪人ものゝ方が専門は却て確かである。

曰く管嶺、曰く鄧洲、曰く大徹、曰く何某と云ふ様なものだが、さて一方は德行あれども活智が乏しい。又た一方は智慧に富んで活潑々地たれ共、德行に缺點があると云ふ通弊があるが、管長は德行家でも好いが、僧堂の師家は、是非充分に専門の出来た豪傑を据えて置かねばならぬ。たゞの模造遺ひの師家では、兒戯禪に流れて仕舞て真箇禪の特色と云ふものがなくなつて了ふから、其邊に注意して専門中の専門家を僧堂の師家にせねばならぬ。衲が若い時分には各地の師家に就いたが、其中には品行を見ては愛憎のつきる者もあつたが、其様なものには又た却て専門の方には至て良好なる所があるから、此方から其善惡正邪を取捨して、善くない真似を爲すして、其至妙なる處計りを取る爲に、辛抱して居た事があつたよ。

衲が最後に久留米梅林の僧堂に入つた時の初一念は、迎も衲の様に身體病弱ては禪の豪傑と成る事は出来まいから、せめて専門の禪堂に入つて朽ち果てたら、それて本懐である。それが禪坊主の本分であると決心して、已に禪堂で死ぬ氣て毫も野心が無かつ

たのだ。がだんく遣つて居ると、漸々身體も壯健と成つて来て、精神の方も亦剛強と成つて、遂に期せずして必死を決心した者が復活したのであつたよ。それだから今の禪僧が、立派な寺に住職を仕たい爲に、僧堂に長く居て履歷を拵へ様との野心や、早く悟り度いとかが、在家の者が病氣で困るから保養の爲に禪學をやる等では、實に見込が付き兼ねる。

百五十、諸魔外道も我眷屬

禪を修するは、死に去つた佛を呼ぶてなく、活きた潑刺たる活佛を呼ぶ所以だ。六度萬行の修習は、不休息精進を根本とす。此見地に立ちて、一切の佛國土を觀察して厭倦を招かず、度斷知證する時は、喜怒哀樂の發動着々其節に中つて誤謬がない。だから在家若し之を行ずれば、享主は享主の佛國土を現じ、女房は女房の佛國土を現じ、子弟は子弟の佛國土を現す。出家の法輪を轉ずるは、説教法話に限らず。火鉢の火を

持つ、下駄の足を載せ、帽の頭を覆ふ、是れ其本分を盡すもの、本分の存する所此れ法輪の健轉して居るのだ。而して、差別即無差別、無差別即差別、知つて知らぬ風をするは覺者の態度であつて、大默維摩の如く深く、無二三昧に入つて宜しく受用すれば諸魔外道も亦た來りて我が護法善神となる。

活眼を開き來れば、異旨逆境は悉く此れ自心現量の影像である。自糞の汚臭も自家の腸腹より出たのではないか。

大正三年十二月十五月初版發行
昭和九年十二月一日普及版印刷
昭和九年十二月五日普及版發行

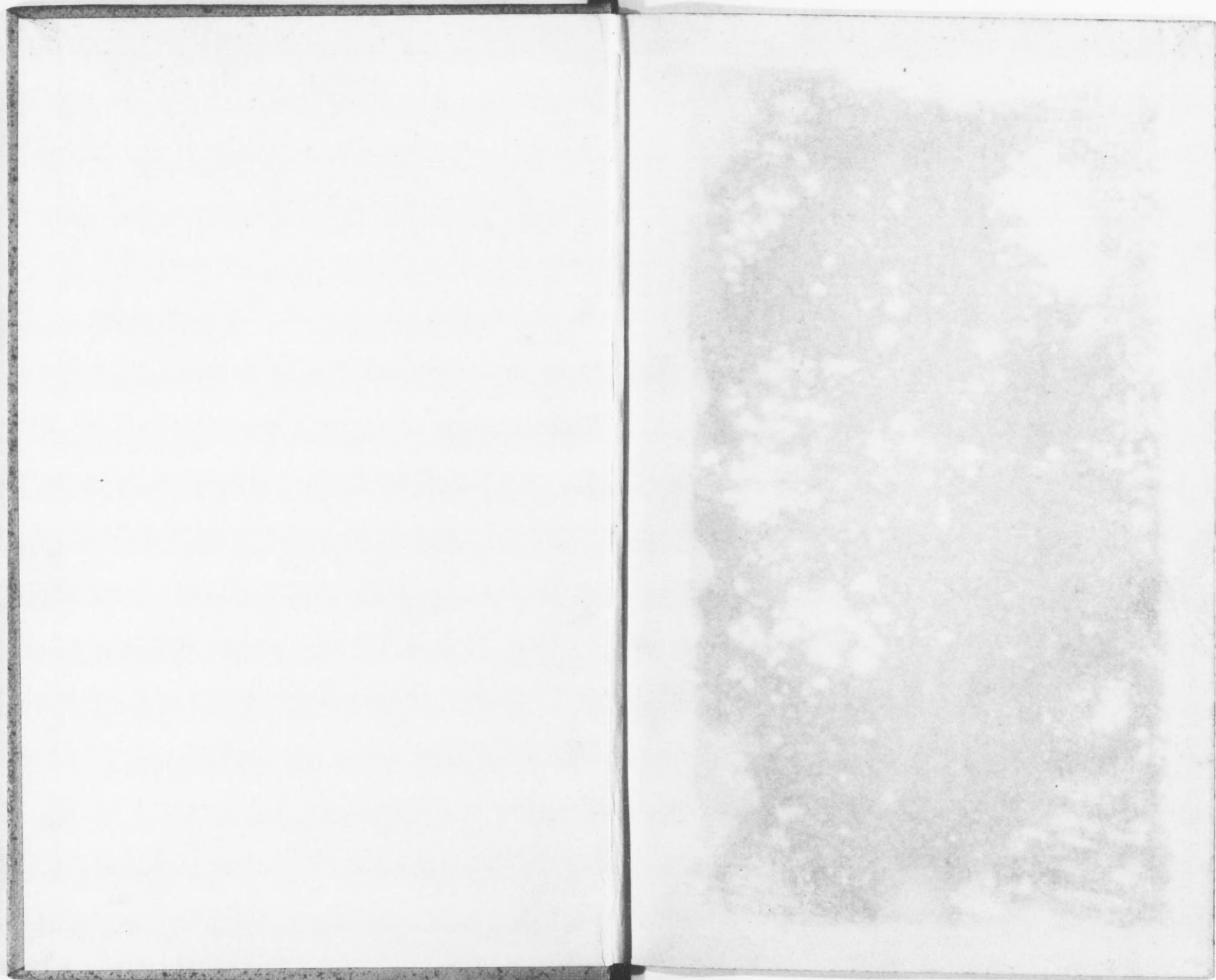
禪の面目
定價金壹圓

不許
複製

112

著者 竹田 默 雷
發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹退三
印刷者 東京市神田區三崎町二丁目一番地 株式會社 明章印刷所
代表者 細谷 祐三
發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地 丙午出版社
發賣所 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院

電話 神田二一四七番(3)
振替 東京四九九一



終

